

全国邪馬台国連絡協議会会報 第14号 邪馬台国新聞

発行 2022年4月25日

頒布価格 500円

発行所 全国邪馬台国連絡協議会

発行者 会長 井上修一

〒105-0013 東京都港区浜松町2丁目2番15号
浜松町ダイヤビル2F

URL <http://zenyamaren.net>

E-mail: zenyamaren@gmail.com

50年ぶりに「楯築墳丘墓」発掘調査報告書刊行さる.....	岡 将男 1
顧問投稿.....	2
吉岐 一郎、大平 裕、小林 敏男、関 裕二、宝賀 寿男、森岡 秀人	
会員投稿.....	12
天川 勝豊、伊藤 雅文、内野 勝弘、岡上 佑、尾関 郁、酒井 正士、槌田 鉄男、平松 全一	
安本美典が解き明かす古代史・邪馬台国の真実 !!	24

50年ぶりに「楯築墳丘墓」発掘調査報告書刊行さる

全国邪馬台国連絡協議会副会長(中四国支部長) 岡 将男



昨年12月、発掘報告書「楯築墳丘墓」が岡山大学学術成果リポジトリ(pdf公開中・下線で検索)が発表・刊行された。楯築遺跡は1971年に遺跡として認知され、1976年から1989年にかけて7次の発掘調査が行われた。1992年には『楯築弥生墳丘墓の研究』が楯築刊行会から、発掘責任者の近藤義郎によって発行されたが、正式な報告書は無かった。今回、近藤氏の愛弟子とも言える宇垣匡雅氏が、学生時代以来の長年の成果をまとめた。実に50年ぶりの報告書だ。

楯築弥生墳丘墓の画期性は、特殊器台、弧帯文のある弧帯石、楽浪郡の影響とされる木棺木槨墓など、前方後円墳に繋がる墳墓祭祀にある。

今回まず特殊器台34個の存在が確認され、平原や西谷に似た大柱3本、墳丘上の建物遺構、近辺の女男岩遺跡の家形土器(倉敷考古館所蔵)と同様の土器10個の存在があきらかにされ、さらに楯築の語源でもある頂上立石と列石の再評価もなされ、その後の西谷3号墓、赤坂墳丘墓、纏向遺跡などの成果も加味して執筆された。地元岡山でも驚愕であった。また楯築遺跡では桃核が顕微鏡植物検査では発見されており、直下の上東遺跡の桃核9608個との関係も注目される。

高度成長期より全国の住宅・道路の開発が進み、膨大な緊急発掘調査が行われたが、それぞれが必ずしも十分に再検討されていない。邪馬台国論争を深める上でも、我々はもう一度この事実に向き合わなくてはならない。岡山ではいま、楯築遺跡にある給水塔を撤去する等の復元プロジェクト(楯築遺跡ルネッサンス)を立ち上げようとしている。

令和4年3月20日

報告書表紙



楯築模型・岡 将男試作

拝啓 紫式部様 にはん紀はいかさまですね

元沖縄大学教授 壱岐 一郎

あなたの『源氏物語』千年紀を大阪で迎え、「恋文」約3千字を関西民放クラブ会報に寄稿して早くも14年経過しました。その後、老生は東下、東京転居し、馬齢90歳を迎えました。ボケていますが、40代で知った、あなたの言葉は鮮烈で、私の後半生の導きの北極星になっています。今、座右に考古学者・森浩一さんのメモがあります。奇しくもあなたと森さんの言葉は共通しています。

「にはん紀などは片そばぞかし」（源氏一蛍の段）、「壱岐さんの扶桑国論に注目」（森さん2010年）。

—中国・西安刊『源氏物語』片そば訳「一片」

1の段 中国史料を避けた『日本紀』（現・日本書紀）

いくつかの大きな記録がありますが、八世紀の編修者は削除・脚色しているようです。

秦始皇帝の使者徐福ら3千人強の渡来 三国時代・呉水軍2万の渡来・魏と卑弥呼の関係
南梁 扶桑国への仏教伝道、僧の訪梁 隋の使者訪倭・大王(男王) 面接

これらは約千年近い間の画期的な出来事ですが、『日本紀』はどこかあやふやに書き上げました。その完成の8年前に『古事記』が編集を終えています。正史は無視しました。現在、古事記は地下に潜らされたという説もあり、研究に使われる版は都を離れた名古屋・真福寺本です。この『記』は王統とその陵墓をまとめているのが特徴で、それだけでも「大事業」です。8年後の『紀』と漢字の使用法が異なっています。『記』が天皇を「命」とした例を「天皇」にしたのもその1つです。

—中国・天津『東北亞学刊』寄稿2015年Ⅲ期『対日本古代史の重新認識』

2の段 七世紀前半の2女王・飛鳥政権は実在ですか

『紀』の七世紀前半は、漢風おくり名で推古—舒明—皇極—孝徳—斉明(再)—の流れとし、推古に摂政・厩戸太子がついています。二十一世紀の研究者はこの太子・聖徳太子を疑う例が増えており、皇極女王後の「大化の改新」原因も疑われ「乙巳の変」とされています。「改新」の証拠が西暦645年からかなりずれて七世紀末に及んでいるからです。

さらに、中国・韓国史料・韓国考古資料を見ると、飛鳥政権王統の実在が疑われます。

『隋書』は推古女王ではなく男王・阿每多利思比孤に会ったとし、その後の大王を記していません。『旧唐書』は無視し、百年古い『通典』も同様です。一方、新羅について、『隋書』は真平王を記し、その2代前の真興王を記しており、この王の巡狩碑は現存し、碑文を読むことができ、二十一世紀にほぼ同時代の碑が新発見されています。不思議な事実は、倭列島では四～六世紀の古墳時代に金石文が朝鮮半島に比べて著しく少ないこと、さらに「ヤマト王権」の奈良・大阪に見るべきものが皆無に近い事実で、僅かに紀伊・橋本の隅田八幡神社・人物画像鏡の47字(1字欠)が知られるのみです。周知のように、地域に関わる事績を紹介した例は熊本・江田船山古墳の刀剣(74字—6字欠)と二十世紀に発見の埼玉・稲荷山古墳鉄剣(115字—5字欠)の2銘文です。これら、南北の「辺地」での出土は何を意味するのでしょうか。私は盗掘されていない陵墓が菅田御廟山古墳(通称・応神天皇陵)だけだとする見解に立つなら、ほかの陵墓で金石文は意図的に抹殺された可能性を否定できないとしています。

なお、『旧唐書』は新羅・善徳女王(632～)を明記し、続く真徳女王の名とその詩を掲載しています。

3の段 今世紀の8年間、飛鳥・難波・河内を歩いて

私は大阪に居を移し、表記の地域を歩いて、また自転車、友人の車で見て歩きました。あなたの『源氏物語』千年紀に出会ったのは幸いでした。昔の高校同窓会の会報編集で大阪—金沢を15回往復でき、あなたが若いころ過ごされた越前国府のあった武生を見ることができ、琵琶湖の西岸を列車で通り、1回は友人の車で見て歩きました。また、親友の「町学者」藤田友治兄が50代で急死したために『古代史事典』通史約400頁の編集を継承しました。あなたのお言葉と大阪の町学者・山片蟠桃の「神武から千年は夢のごとし」を土台に据えています。2012年春、本は発刊されましたが、惜しくも相棒で同年の伊ヶ崎淑彦兄は直後に他界しました。この通史事典はすぐ再版をみていますが、前記の「徐福集団渡来」「呉水軍渡来」「邪馬台国広域説」から「扶桑国実在と仏教民間伝道」などを取り上げています。あなたの「日本紀」片そば説に誠実だと自負しております。

桑国の約350字の記述に仏教の民間伝承があって注目されます。問題は「大漢国」の存在と表現です。帯方郡から2万4千余里のはるか遠い国ということで、欧米では太平洋を越えて、メキシコ沿岸に想定される例が多かったといえます。中国の研究者も苦心しました。

—グスタフ・シュレーゲル著・中文訳『中国史条中未詳諸国考証』商務印書館

さて、私は諸橋大漢和で「大」の解釈に数十あり、最後に「離れた」とあるのに注目しました。なるほど、『三国志』の「一大国」は対馬にくらべ面積の大きな島ではなく、7分の1です。とすると、大漢国はgreatではなく、far なのです。しかし、証言した僧は、大漢国の表記を知りません。史官は2つを併記しています。史上、古代中国は「大秦国」をローマ帝国、「大夏国」をペルシヤの表記しています。

7の段 あなたは尊敬すべき言論人・ジャーナリスト

早くも十一世紀初めに大著『源氏物語』で日本紀の悪の根源を告発されたあなたは優れた言論感覚をお持ちでした。千年後の日本国には文字・映像・などあらゆる多面的言論人は百万人をこえるでしょうが、あなたのように研ぎ澄まされた政治感覚を持つ女性・男性は見受けられません。作家でいえば二十一世紀、90代の生を全うされた瀬戸内寂聴さん、橋田壽賀子さんが候補でしょうか。両作家は物語に「道々しく詳しくことあらめ」通りの筆でした。

さて、非専門家の私はこの半世紀強にわたり、東西の碩学の著書を渉猟してきました。そこで気づいたことは、日本史学(「国史」)・日本語学(「国語」)の分野では『記紀』の批判的追究にが意外に稀有だということです。すでに言及しましたが訓詁注釈に傾斜し、新しい学問的発見に慎重過ぎるといえます。この紫式部さんの「にほん紀」批判も私の知る限り、哲学の梅原猛教授が最初でした。昨今の新書版『紫式部』や『源氏物語』論には取り上げられていません。私の管見であればむしろ幸いです。

二十一世紀は地球上、女性の時代だといわれます。人類の文化史ではあなたは正しくその先駆者でした。特に日本では実力のない男どもがのさばり続けました。そのあげく、史上初めて大がかりな侵略戦争に暴走し、決定的な敗北を喫しました。ここ3年は国際的な伝染病に襲われ、四苦八苦です。しかも、ロシアは南のウクライナを不合理に攻撃しています。アメリカと共に旧大国・男性指導者の驕りでしょうか。今、日本では政治に女性議員の比率を割り当てる「クオーター制」が検討されています。政治から科学・技術、文化の分野へ、デジタル時代の盛り上がり、女性の活躍に期待したいと思います。男どもは2千年威張り通した事実があり、これからは女性を支える新武士道が望まれるでしょう。

その最高のモデルは雑音と苦闘された、天才のあなたです。

敬白

邪馬台国北九州説の崩壊

(公)大平正芳記念財団 大平 裕

本題に入る前に指摘したいのは、いわゆる「邪馬台国」という国名、呼称についてです。やまとことばの「ヤマト(やまと)」、『後漢書(倭伝)』の「邪馬臺国」、『三国志魏書倭人伝(以下『魏志倭人伝』)の伝える「邪馬壹(い)国」、そして『後漢書(倭伝)』の注釈、『隋書倭国伝』及び清朝時の『後漢書集解』のいう「邪馬堆国」という4種類があるということです。殆どの学者たちは、これらのいささつ、原典を見過ごし、『魏志倭人伝』を使用しながら同伝の「邪馬壹国」を誤字として『後漢書』の「邪馬臺国(邪馬台国)」という国名をフルに使っているのです。

これは重要なポイントで、『後漢書(倭伝)』の注釈は6世紀、唐の高宗と則天武後の第2子、章懐太子が指摘しているのですが、当時の中国からの使節が、本来「ヤマト」という「音」を誤って、「堆」とすべきものを、「臺」の字を当ててしまったというものです。太子は「後漢書」の注釈者として有名な学者です。

筆者は「ヤマタイコク」という呼称は、日本語(やまとことば)には似つかわしくない言葉であり、章懐太子が指摘しているように、本来あるべき我が国の国名は「ヤマト(邪馬堆)」に違いないと思っています。

もしこの説が正しいということになれば、まず、いわゆる「邪馬台国北九州説」は全く成り立たないということになります。福岡県みやま市には「山門」という地名がありますが、これは発音の表記から「ヤマト(大和)」と同じ発音はないので、検討の対象から外れた言説です。

さて、本題に入りますと、筆者が「邪馬台国北九州説」崩壊の理由として、第一に問題として取り上げるのが、「夷守」です。「夷守」とは、遠方の国境周辺に展開する防衛拠点、防衛組織及びその役職を意味する言葉ですが、なんと北九州には対馬国、一大(宍岐)国、奴国、不弥国に夷守が置かれていました。「夷守」という

のは、遠くにおいて国を守るという意味ですから、北九州、特に福岡県の甘木、朝倉、夜須あたりが都であれば、東京都のすぐ真北に北海道防衛師団の本拠地を何ヶ所も抱えているようなもので、全く不合理な話で理に合わないこととなります。

「夷守」という地名は、『延喜式』にも現在の博多の東方付近の官道沿いに「夷守駅」が記載されていて、平安時代にも都からの遠方を認識・記憶していたようです。また、第12代景行天皇の九州巡行の際に訪れた襲の国との国境、現在の小林市に「夷守」が置かれていましたが、これは大和の地からは最南端の地の防衛拠点の跡で、肯げられる話です。

第二の問題は、不弥国についてです。『魏志倭人伝』には、不弥国は奴国(博多駅周辺)より東に百里進み不弥国に到着。長官は多模、次官は卑奴母離、千余戸の人家がある。不弥国から南へ水行二十日すすむと投馬国に到達とあります。しかし、博多から百里(約20キロメートル弱)相当の不弥国と思われる地、福岡県糟屋郡宇美町を筆者も訪れてみましたが、神功皇后ゆかりの宇美人幡宮があるのみで、山に囲まれた南に水行どころの場所ではありませんでした。

問題は、「邪馬台国北九州説」の方々も、不弥国の所在地、南に水行でスタートする場所については全く触れることはありません。筆者は、明らかに都「ヤマト」から一大率に派遣された役人の間違いにしては、あまりに距離的に一大率から離れたところではなさそうなので、聞き手である魏の帯方郡の役人の書き間違いであると考えています。しかし、奴国から海沿いに水行をスタートする地として、東西へ向かうのに便利な港を探しましたが、筆者にとって適当と思われる港は、博多から東北へ45キロもある津屋崎しか見あたりませんでした。

不弥国の所在地が不明であるということは、南へ水行云々以前の話で、これが解決しない限り、東への改変は駄目、南に行くべきという論争にもなり得ません。

第三は、「邪馬台国北九州説」の場合、東へ向かっても(畿内に相当する)国々があるのではないかと、『魏志倭人伝』の「女王国の東、海を渡ること千余里のかなたに、また国がある。いずれも倭種の国である」云々を強調しています。これに対して筆者は、伊勢から東に三河へというルート、敦賀から北陸へのルートがあることを指摘してきました。そしてさらに指摘したいのは、北九州は関門海峡で中国地方と近接していることです。海峡が一番狭いところでは500メートル位しかありません。海の難所ではありますが、明らかに北九州とは別の文化圏に属していたとは思われません。長門、周防、石見と安芸といった国々について、「邪馬台国北九州説」の方々も、2地方のつながりについて誰も触れていないのが問題です。



関門海峡 (googleマップより)

第四は、人口問題です。『魏志倭人伝』には、対馬国千余戸、一大(老岐) 3千戸、末盧国4千余戸、伊都国千余戸とあります。続いて沿岸最大の奴国は2万余戸、不弥国千余戸とあります。1戸5人として、奴国は10万人の都市国家です。ついで投馬国は5万余戸、邪馬台国は7万余戸、それらを合計して15万戸余りとなります。因みに「邪馬台国北九州説」では、現在の福岡県北部及び佐賀県北部の一部で15万戸ほどを擁していることとなりますが、このようなことがありうるのでしょうか。鬼頭宏著『人口から読む日本の歴史』(講談社学術文庫)によれば、奈良時代の推定人口は、北九州は約34万人、山陽・山陰地方は約43万人、畿内及び畿内周辺では約96万人です。

次に『延喜式』『和名類聚抄』からの統計によりますと、田積(農地)は、筑前は18,500町、吉備(備前・備中・備後)は32,713町、畿内(山城・大和・河内・和泉・摂津)は45,298町となっています。これらの数字はズバリ当時の経済力を表していることは言うまでもありません。奈良時代より更に500年前となると難しい話ですが、これら三地方の基本的特性が逆になるとは考えられません。

第五の問題として、水行30日という日程数の話があります。『魏志倭人伝』には不弥国から南へ水行20日で投馬国に到着、そして投馬国から南へ水行10日、陸行30日で邪馬壹国に到着とあります。南、東の問題は別にして、不弥国から30日で邪馬台国に到着することになります。これは『延喜式』に京都から大宰府までの所要日数、水行30日とほぼ一致するのです。北九州のしかも福岡県の北半分をグルグル回って30日かけて海もないのに邪馬台国へとは、おとぎ話以外には考えられない話です。

また、水行が20日と10日に別れ、そして後半、陸行30日ということについての疑義が多くあることは承知していますが、奴国近辺から投馬国(軻の津、または玉野)まで20日、その投馬国は吉備の地と考えられます。吉備の国は後世の常識で考えれば、古代は大和に次ぐ大国であり、『魏志倭人伝』にも人口5万余戸とあるように、瀬戸内航路の最大の寄港地でした。ここからの水行では、投馬国以東の播磨灘、明石海峡、茅渚の海までは、それまでの水行に比べ、島々がほとんどなくなり、大海を横切ることになり、さらに海難の名所である明石海峡などを考えると、投馬国の位置が東西水行30日の航路を画す重要な地域であったことが考えられるのです。

地域	海路	陸路(上り)	陸路(下り)
播磨	8日	5日	3日
備前	9日	8日	4日
備中	12日	9日	5日
備後	15日	11日	6日
安芸	18日	14日	7日
周防		19日	10日
長門	23日	21日	11日
大宰府	30日	27日	14日

『延喜式』での各地への所要日数
藤岡謙二郎著『国府』(吉川弘文館)より

以上、これまで筆者が主張してきた「邪馬台国北九州説」が成り立たない理由を、一部にしかすぎませんが述べてきました。戦後も80年を目前としていますが、国の内外の社会経済情勢は激変をとげてきています。デジタル時代はこれまでの一方通行より双方向へ、そして双方向プラスデジタル所有になり、地上だけの思考だけでなく、宇宙からの思考が必要となる時代に入ってきました。現在、劇場型のロシアによるウクライナ侵略が進行中ですが、まもなくミサイル・戦車・軍艦などは不要になり、宇宙間を含めての戦いに変わりつつあります。デジタル技術の革命的進歩に日本は遅れをとってきていますが、それどころか思考の根本である歴史への考え方も我が国の場合、他の分野に比べて遅れをとっていて、特に文献歴史学にはそれが目立っています。

日本の古代史を振り返ってみますと、2、3世紀の歴史的記述は、いわゆる卑弥呼についての記述のみで、他の同時代の社会や人物については一切触れられていません。歴代天皇についても、第15代応神天皇(390年即位)の名が初めて、日本史年表に出てくる有様です。今後の古代史を研究する若い学者たちに、大いに期待したいところです。

拙著『邪馬台国再考－女王国・邪馬台国・ヤマト政権－』の意図したところ

大東文化大学名誉教授 小林 敏男

(1)

今度、新書本で本書を刊行(筑摩書房)したので、ここでは筆者が意図した所を簡潔にのべてみたい。

一番の骨子となるのは、ヒミコやイヨ(トヨ)の女王国と邪馬台国を別個の国として分離した点である。その出発点となったのは、郡から一万二千里と里数で示された女王国(筑後国山門郡を中心とする)と、日数で示された伝聞記事の邪馬台国(畿内ヤマト)の質的相違である。そして、魏志倭人伝の著者陳寿が「邪馬台国は女王の都する所」と邪馬台国と女王国とを行程史料の操作によって同一の国とみなしたためである。おそらく陳寿の机上には少なくとも、二つの別々の行程史料があった(A・B)。

A 郡 → 対馬 → 一支 → 末盧 → 伊都 → 女王国 - 狗奴国

B 郡 → 対馬 → 一支 → 末盧 → 伊都 → 奴 → 不弥 → 投馬 → 邪馬台国

陳寿は、普通名詞の女王国を固有名詞の邪馬台国とを同一のものとして操作－認識することによって、先に示した魏志の文となったのである。

その史料的根拠を示せば、魏志の先行史書である「魏略」本文では、伊都国で一段落が終わり、次の伊都国より邪馬台国への行程についてはほとんど記すところがなかったこと、また「広志」では、伊都国までの到達が示され、そのすぐ後に「又南、邪馬台国に至る、女王国自り以北、其の戸数道里を略載す得べきも・・・」とあり、邪馬台国＝女王国が伊都国のすぐ南にあったように記されている。「広志」については、魏志倭人伝より後の史書であること、また類書であることもあって、陳寿にならって女王国を邪馬台国とを同一視していること、また本来の姿が簡略化されたり、変更を加えられたり疑いがあることが注意されなくてはならない。重要なのは『翰苑』の張楚金が記している「百二十五、邪届(馬)、伊都傍、連斯馬」の題目(見出し)の下に「広志」が引用されていることで、「広志」の本来の姿(原姿)は、女王国は伊都国より南の傍(かたわら)にあり、奴、不弥、投馬、邪馬台国などの記述はなかったのではないかと推測した。「広志」については、邪馬台国＝女王国となっているため少々理屈めいた議論になってしまった。

結論としては、「広志」の本来の姿からうかがえるのは、郡から一万二千里にある女王国は、伊都国のすぐ南に「傍」にあると考えられるから、伊都国を起点とすると南一五〇〇里(郡から伊都国までは一万五百里)の所

にあるということになる。「魏略」や「広志」(本来の)には投馬国や邪馬台国の記述はなかったのではないか。

(2)

以上の女王国と邪馬台国の分離によって、ヒミコ・イヨの女王国は、北九州の筑後国山門郡を中心としたヤマト国であり、一方、邪馬台国は伊都国、もしくは不弥国から水行二十日の投馬国(出雲の地)を経て、日本海ルートで「水行十日、陸行一月」の畿内ヤマトのヤマト国ということになる。いわば、二つのヤマト国を想定したことになる(二つのヤマト国の親縁性について別途課題である)。

以下、魏志倭人伝からうかがえる政治地図についてのべておきたい。

A 北九州の女王国(女王ヒミコ)を盟主とする対馬、一支、末盧、伊都、奴、不弥の北九州沿岸の七カ国連合体。

B 戸数五万戸の投馬国(出雲)、七万戸とされている邪馬台国(畿内ヤマト)。伊都国(女王国)からみた場合、辺地の大国であり、二国は日本海ルートで緊密に結ばれていた。

C 女王国に統属する二十一カ国(九州を中心とした地域か)

A～Cの三十カ国は、倭王(倭女王)のもとに倭国を構成する国々で、倭人伝には「使訳通ずる所三十国」とあって、魏王朝・帯方郡への朝貢国であった。そして、女王国の南に男王国である狗奴国(クマソの地)があったという政治地図となっている。

(3)

そうした三十カ国の構成国のなかで、北九州沿岸の女王国連合体と畿内ヤマトの邪馬台国は基本的には併存関係にあったものの、時には邪馬台国が伊都国内に設置した「大率」を通じて緊張-対立する場面もあった。この「一大率」と「刺史」とは佐伯有清氏に従って分離して、「一大卒」は邪馬台国が帯方郡-韓国との外交・交易のために伊都国内に設置した官で、それが時には女王国連合体の脅威となる場合もあった。

こうした政治地図に大きな変化がおこるのは、次の女王イヨ以後のことで、邪馬台国によって女王国連合体が打倒されたとみられる。

この辺になると古事記・日本書紀の活用が必要となり、新書本では八章終・おわりに古事記・日本書紀の活用にふみこんでみた。記・紀批判の問題もあって、回答はそう簡単ではないがある程度のスケッチを試みた。

アメノヒボコとタニハ(但馬、丹波、丹後、若狭)とヤマトのあれこれ

歴史作家 関 裕二

アメノヒボコ(天之日矛・天日槍)は、『日本書紀』や『古事記』『播磨国風土記』などに登場する古代史の有名な人物だ。新羅王子で、第十一代垂仁天皇の時代に来日したという。第十代崇神天皇が実在の初代王と考えられているし、アメノヒボコは崇神天皇を慕っていたというから、彼はヤマト建国前後に来日していたことになる。

一般に、古代日本は朝鮮半島や中国よりも劣っていたと信じられてきたから、新羅王子が来日したという話を聞けば、征服されていたのではないかと、つい想像してしまう。

しかし、それほど単純な話ではない。考古学は、興味深いヤマト建国の構図を示しつつあって、強い渡来王の征服は、想定不可能になってきているからだ。強い権力の発生を嫌った銅鐸文化圏の人々がヤマト(桜井市の纏向遺跡)に集まったこと、地政学上の優位性を誇るヤマトの出現に、吉備や出雲が後れをとるまいと靡いたことだ。しかも、これを仕掛けたのは、タニハ(但馬、丹波、丹後、若狭)だったようなのだ。北部九州と出雲が手を組み、東を圧迫し、これに反発したタニハが、近畿地方南部、近江、東海の発展を促し、東海地方の人々が、奈良盆地の東側(オオヤマト)に進出した可能性が高くなってきた。

ならば、この考古学が描くヤマト建国の構図に、アメノヒボコをどのように埋め込めば良いのだろう。

無視できないのは、『播磨国風土記』の記事で、瀬戸内海沿岸部で出雲神とアメノヒボコが戦ったという話だ。『播磨国風土記』は朝廷に提出される前の原本がたまたま残っていた物だった。正史とすりあわせができていなかったために、歴史時代のアメノヒボコが出雲の神と戦うという奇妙なことになっている。おそらく、出雲とタニハの主導権争いが起きていたと、播磨の人々は語り継いでいたのだろう。

ならば、播磨でなぜ日本海側の二大勢力が争ったのか。結論を先に言ってしまうと、「明石海峡の争奪戦」だと思う。ヤマト建国の直前、「タニハの但馬に棲みついたアメノヒボコ」が、西から圧力をかけてきていた出雲に対抗するための策を練ったに違いない。そして、明石海峡を奪おうとしていたのだろう。明石海峡を出雲と吉備に封鎖されて、タニハとヤマトは瀬戸内海から閉め出されていたのだ。逆に、瀬戸内海の東の狭い出入口をタニハとヤマトが奪えば、吉備はヤマトの軍門に降らざるをえず、出雲も、戦略の練り直しが求められたに

ちがない。事実、吉備は東海勢力がヤマトに入ったあと、あわてて河内に進出していた。ヤマトにも、吉備の人々が棲んでいる。

銅鐸文化圏の人々がヤマトに集まり、明石海峡をタニハが奪取した時点で、吉備も出雲も、ヤマト建国に参画せざるをえなくなったのだろう。ヤマトの生駒山と葛城山が天然の城壁となって、西側からの攻撃をはね返す力を持っていたのだ。

ここで、「新羅(辰韓)の立ち位置」を確認しておこう(ただし、まだ新羅という国はなかった。便宜上、朝鮮半島南東部を新羅と言っておく)。新羅の人々の御先祖様は、秦の始皇帝の苦役から逃げて来た人びとで、馬韓(百濟)は東の土地を与えて、住ませた。新羅は山がちで閉じ込められた土地だった。北側は騎馬民族が牛耳り、朝鮮半島南部には、優秀な海人がいて、日本列島と盛んに往き来していたが、この海域を通るのも、厄介だ。だから、発展の可能性は低かった。ただし、唯一の手段が、タニハと手を組むことだったと思う。弥生時代後期のタニハも、出雲と北部九州に押され、北部九州→壱岐→対馬→朝鮮半島南部の多島海へと続く安全で便利な航路を使うことができなかった。そこで、タニハは新羅と手を組み、明石海峡を奪い、出雲に圧力をかけ(出雲の東側にタニハ勢力が集団移住していたことは考古学は把握している)、出雲も白旗を挙げたのではなかったか。三世紀に纏向遺跡が出現したあと、近畿地方や出雲の人々が北部九州沿岸部になだれ込んでいたことも、考古学は明らかにしている。出雲はヤマト側に寝返っていたのだ。一連のタニハ、近江、東海、ヤマトの戦略の中に、新羅王子・アメノヒボコがからんでいたと考えれば、多くの謎が解けてくる。

古代の瀬戸内海航行の可能性

日本家系図学会会長 宝賀 寿男

はじめに

私が十年ほどにわたり手掛けてきた古代氏族シリーズについて全十八巻刊行のメドがついた昨年秋以降、鋭意取り組んできたテーマが、山陽道・四国に関連して、上古代の瀬戸内海航行が可能だったかどうか(可能な場合は、どのような形か)ということである。

これは、長野正孝氏が著書『古代史の謎は「海路」で解ける』(二〇一五年刊)で記されるもののなかに、上古代にあつては、基本的に瀬戸内海航行が不可能であつて、五世紀後半の雄略天皇が吉備を押さえ同海路の啓開事業を行ったことで、その航行が可能になったという見方が提示され、ネットでもこれに同調する記事も散見する故の問題意識である。

この見方がもし正しければ、瀬戸内海を通じる神武東征や景行天皇の九州巡狩、神功皇后外征はまず不可能だし、邪馬台国時代の魏朝(帯方郡)から倭地への遣使も、それが大型船によるのなら日本海(出雲回り)の経路でしかなされず、邪馬台国畿内説は同様にまず成立不可能ということになろう。四世紀後葉から始まる倭の韓地における新羅や高句麗との戦いでも、倭は軍兵等の大量動員が日本列島からはほぼできないし、五世紀前葉からの「倭五王」の中国・南朝への遣使ですら、出発地が九州からしかなされ得ず、倭王讃に比定される仁徳天皇は北九州にでも居て、幻の「九州王朝説」に加担するものにもなる。

こうした諸事情だから、弥生時代及び古墳時代に使用された海上交通及び陸上交通の祖手段も含めて、海事関係者の動向・分布などを広く総合的多面的に考える必要がある。

古代瀬戸内海の航行

大化前代の大和王権を構成した主要古代氏族に関して言えば、その殆どが山陰の出雲地方を經由して畿内地域に入ってきたものであろう。その例外的な氏族としては、神武・崇神の皇統、息長氏族や中臣氏族、阿曇・和邇氏族くらいではないかとも思われる。その意味で、古代日本の海上交通のメイン通りは日本海だという見方もできよう。三浦佑之氏の著『「海の民」の日本神話』(二〇二一年刊)もほぼ同旨のようで、古代史における出雲地方の重要性を様々な面から説かれ、古代日本の「表通り」は日本海側だったと言う。だから、拙見でも出雲地方の重要性を無視するつもりは毛頭ないが、瀬戸内海航行の重要性や上古からの航行可能性を狭い視野で否定する論調には、結論的にまったく反対である。

弥生・古墳時代に倭地で使用されたのが「準構造船」(刳り抜き丸太を組み合わせて船底にし、その上に舷側板を設けた形の船)であり、それが、列島各地ばかりではなく、韓地南部の慶尚南道の金海市の鳳凰洞遺跡とその西北方、昌寧郡の松岷洞七号墳から出土した事情もある(韓地の船いづれも日本製の可能性があるともいう)。この種の船の航行可能性とその航海・輸送の能力を十分考えて、上古代の歴史のなかで考えていかねばならない。陸上の輸送手段たる「馬」も、考古遺物などの諸事情からみると、四世紀後葉に韓地からもたらされるまで、倭地には棲息しなかったことで、それまでの時期の倭地における戦、すなわち遠征・出兵は徒歩と船でのみなされたことにな

る『魏志倭人伝』には、倭地に馬がいないと記されるから、魏使の倭地における主な移動も、船か徒歩によるものであった。

ということで、まず上古代における瀬戸内海の航行の可能性を、この辺の基礎的な検討から始めてみた結果が以下の通りである。とくに瀬戸内海西部海域の芸予海峡・芸予諸島と、その北岸・南岸など近隣地域に住む古代・中世の氏族・諸氏に注目される。

記紀の記事などが、主に崇神朝までの畿内からの「四道将軍」と吉備・出雲への王権軍勢の派遣を伝える。それが四世紀前葉に現実になされたものであるならば、その頃には、大和王権にあつては、西方では少なくとも吉備・出雲までの版図をもち、摂津・近江あたりからそこらまでの陸路・海路が確保されていたとみるのが自然である。瀬戸内海の海域地形にある島々・岩礁の複雑さなど、航行が御しにくい諸条件でも、博多平野を主拠地として倭地に長く住んで交易・漁撈など様々な海域活動を行った海人族(海神族)が、九州につながる瀬戸内海に航路を確保できてなかったとは、到底思われぬ。

長野氏の上記著作は、地理などの自然条件や航海技術を重視しすぎており、歴史に果たしてきた人間の各種技術・活動や学習能力の可能性を殆ど考慮できていない。弥生期の讃岐サヌカイトの広域分布など、瀬戸内海地域圏の弥生・古墳時代中期末頃迄の遺跡や交流遺物が膨大な数あつて、それぞれ孤立したものではない、という人間や部族集団の活動実績・範囲を無視してはならない、と思われる。弥生時代中・後期(～三世紀頃)に見られる瀬戸内海沿岸地域における「高地性集落」の多数の分布という具体的な事情もある。

このように、瀬戸内海でも地理的に芸予海峡とその周辺あたりの地域(これが、日本最大の中世海賊の本拠地域という)の軍事重要性に着目して、上古から戦国末期頃までの瀬戸内海航行問題及びその関連氏族の動向を見てみた。そのなかで、北岸部の安芸の阿岐国造を出した玉作部一族について、中田憲信が『神別系譜』に貴重な系譜を書き残してくれたこともあり(現在、同書が上野の東京国立博物館〔東博〕に所蔵され、ネット上で閲覧可能)、ここでの歴史探索の大きな手掛かりになりそうでもある(最初にお断りするように、この検討対象の関係では総じて史資料に乏しく、ここでの拙見も一つの試論だが)。

北側の安芸・周防、南側の伊予の高縄半島の古族

瀬戸内海の西部海域を北・南から挟む地域の古族を、『旧事本紀』『国造本紀』から考える。同書の記事の解釈・把握については、従来の研究者の見方は疑問が大きく、全国で百三十ほど記載の国造がすべて同時に存在していたわけではないし、国造の重複・欠落もある。これが同書の記事を考える第一のポイントであり、次に、諸国造の系譜記事が全て正しいわけでもなかった(系譜の假冒や訛伝もあるということ)。その辺を何により判断するかの問題だが、適確な国造領域の比定が地理的にできるのか、後裔の存在とその姓氏が何であったのか、国造初祖とされる者が当該地に來た事由が合理的かなどの諸点がある。

「国造本紀」の記事に拠ると、北側地域には安芸・周防の阿岐・周防・大嶋・波久岐の四国造(設置時期の遅い都怒国造を除く)が、南側地域では伊予の怒麻・小市・風速の三国造が存在したとされるが、これを同時期に存在の国造だと鵜呑みしてはいけぬ。また、これら七国造の系譜記事のうち、周防・大嶋及び小市・風速の合計四国造については、疑問が大きい。問題は、領域が不確定か不自然である波久岐国造及び怒麻国造は、ごく初期段階にのみ存在したにすぎず、各々国造の姓氏も後裔も知られない(周防・大嶋・波久岐及び怒麻は、国造初代以外は全く系譜不明)。この辺は、別の拙考(下記)をご覧ください。

ここでは、結論のみを記しておく、瀬戸内海西部海域を、北側からは安芸・周防の阿岐・周防・大嶋の三国造が押さえ、南側からは伊予の高輪半島に拠点をついた小市・風速の二国造が四世紀中・後葉頃迄に押さえた。これら五国造の系譜原態が、みな天孫族系の玉作部の同族に出て、少彦名神の後裔であった。これら諸国造の起源が崇神朝～応神朝に遡り、海神の宗像女神や渡しの神たる「三嶋神」を奉じ、それらの後裔諸氏が中世の戦国末期の河野水軍・村上水軍(河野氏一族も村上氏も未流)などに至るまで長く続いた。「三嶋神」とは、小市国造後裔の越智氏一族が大三島を中心に奉斎した大山積神こと少彦名神(大山咋神)であつて、山祇族が祭祀する大山祇神でもないし、物部氏祖神でもなかった。

吉備への大和王権伸張は、四道将軍による崇神朝とされており(『書紀』など)、ほぼ同時期に置かれた波久岐国造が吉備につながる西隣の安芸・周防あたりにあつた。

この崇神朝の実年代は四世紀前葉頃とみられるから、その頃から瀬戸内海航路が大和王権により管理されていたとみるのが自然であり、それにより景行天皇の九州巡狩も実行された。この海域の大型船の海難事故は、江戸時代でも多かったというが、上古の「準構造船」が潮待ちなどの海神族の航海技術・知識とともに運航されれば、海の流れが早く、干満の差が大きく、瀬戸・岩礁などの難関が多くても、上古でも瀬戸内を航海できないわけではなかった。同航路の要地には、玉作部の同族が配置され、各々が地元海域を知悉していた。大嶋国造の領域も、周防大島(屋代島)という狭い島だけではなく、少なくとも西側対岸の室津半島も往時は陸続きでは

なく、島であって、その勢力圏とみるのが自然である。

六世紀後葉頃には、瀬戸内海沿岸地域の大国造に「凡直」の姓氏が大和王権から与えられたが、それが西側から言うと、穴門・周防・阿岐、四国側の伊余・讃岐・粟・淡道の七国造とされるが、大嶋国造の姓氏が「凡海直」であったことで、同国造の意味を適確に評価すべきである。同国造が、瀬戸内海航路の西側を扼する周防大島におり、大島瀬戸に臨む地にある大多満根神社(玉作部祖神・大多麻流別を主祭神)を祭祀したことが重視される。

そもそも、雄略天皇の時代に瀬戸内海全体を啓開できたとは到底思えない。いったい誰が、何時、どのような者・部族を使役して、その事業を行ったのかという問題についても、その裏付けとなる具体的な記事・史料がまったくない。雄略朝に吉備討伐はあっても、海路啓開の記事はない。吉備氏は崇神朝～応神朝では、大和王権と協調していた事情もある。

それより前の時期の倭王讃などの中国南朝への遣使は、瀬戸内海を通らなかつたとも言うのだろうか。当時の航路や航海技術の点から神武東征がありえないと説いても、海神族の関係者(神武の母系は海神族の本宗で、東征には神武の母方従兄弟も参加したと伝えるし、兵庫からの倭国造祖・珍彦の海導も記紀等に見える)の協力・後援などを無視できない。そもそも神武東征は、「邪馬台国東遷」という一国遷住の大規模なものでは決してなく、小人数・小部隊による畿内への移動・侵攻だから、準構造船で瀬戸内海を少しずつ東方へ進んだものと思われる。瀬戸内海沿岸部には、神功皇后の韓地遠征関係の伝承も『風土記』や神社伝承などで多く伝わる。これらが、みな後世の造作だとするのは極めて無理である。

一応の総括

瀬戸内海西部を囲む地域では、古代玉作部の同族諸氏が海上交通に大きな役割を果たし、当時の準構造船での航行が可能であった。歴史とは、古代からの大勢の人々の手、集団の人知・技術や祭祀によるもので、そこに大きな流れがあることを忘れてはならない。現代の自然科学や航海の知識・技術だけの狭い視野では、古代の歴史問題は解決できず、祭祀・習俗などを含め、常に総合的科学的な視野・知識を必要とするということである。

なお、以上の話しは大部になり、本稿は紙数制約からその要点版にならざるをえず、私に関与する歴史・姓氏の研究二誌『姓氏と家系』『家系研究』のそれぞれ次号に、「周防・安芸の玉作部とその末裔たち―瀬戸内水軍の起源に関する一試論―」「伊予の越智氏・河野氏の祖系と同族」というテーマで詳細を掲載いたしたい(ご関心の方がおられれば、ご覧いただけたらと思うものである)。(二〇二二年三月中旬に記)

高松塚古墳発掘50年 体験者が語る残された大きな課題

新赤穂市史編集・執筆委員 森岡 秀人

つい先頃年度末となり、2月23日には古稀を迎えて関西大学の教員を退任した。出会った考古学専攻生は数多く、文化財保護関係の職に就いた方も増えた。演習室でさまざまなテーマでディスカッションした日々が思い出される。私個人にとってはまた大きな節目が到来したわけであるが、世界はロシアのウクライナ侵攻が始まって以来、毎日緊張感が高まっている。中近東の湾岸戦争の時も思ったことだが、大国が戦争の事態を引き起こすと、地球全体が騒然として心を揺さぶられる。また、オミクロン株から変異誕生したBA2の新株蔓延となってきた新型コロナウイルス感染症の終息はまもなく、今年の陽気下でも脅かされた状況から脱却できないでいる。先行き不透明で不確実な人間社会が厳然としてあり、私たち歴史を勉強するものにとって、戦場や逼迫する病棟が映し出されると、過去繰り返し起こった出来事が現在、未来と連なっていると感じざるを得ない。

さて、いまからちょうど半世紀前の1972年は、日本も世界も大きな出来事が起こり、やはり社会が激変していた。横井庄一元陸軍軍曹がグアム島で発見され生還、連合赤軍による軽井沢あさま山荘籠城銃撃戦、イスラエルのテルアビブ空港乱射事件、沖縄県施政権返還、中国との国交回復、日本列島改造論、そしてサッポロ五輪などが矢継ぎ早に思い起こされる。そのような転換期の社会環境下、私は関西大学文学部考古学研究室の一員として奈良県立橿原考古学研究所の末永雅雄所長(関西大学名誉教授)の総括指導に基づき、奈良県高松塚古墳の発掘調査にほぼ全日加わっていた。研究所の秋山日出雄・伊達宗泰・網干善教の3非常勤所員が発掘を担当され、明日香村が経費50万円を捻出して、1972年3月1日から現地の測量作業や発掘調査に入った。その日、飛鳥は一面銀世



高松塚古墳の発掘に参加した20歳の著者 [1972年3月]

界。静寂の地の檜前に渡来系氏族の往時を感じた。

大学2年生であった私にとって、尾根や谷を越える広域にわたる平板実測や絡まる竹の根と闘い、硬い版築層を掘る作業は重労働であり、深い盗掘坑を追って掘り進める作業は毎日参加学生たち全員が難渋した。鉄兜を伏せたような異様な腰高の墳丘、尾根の頂部を意識して避け、傾斜面に意味ある地点を選び、独立して築かれた高松塚古墳は、元禄以来文武天皇陵に比定された時期があったにせよ、多くの考古学者がその存在を知らない無名に近い古墳であった。墳丘裾部の農夫がこしらえた生姜穴から見える謎の切石を頼りにたった1本のトレンチを墳丘に入れ、硬化した版築土に鍬を振り下ろした。その穴は1960年代からあったという。埋葬施設の手掛かりにはなる二上山凝灰岩の加工石材であった。古墳の墳頂からは宝篋印塔の残欠(九輪)が出土し、土師器や瓦器の破片なども見つかり、漆塗木棺の断片や凝灰岩片が出て、鎌倉時代の盗掘者の活動も把握できるようになってきた。高松塚は手強い古墳であることを考えつつ、掘り進めていったが、交代しつつ現場指導に来られる網干先生や伊達先生には常に新情報を伝え、次の指示を仰いだ。盗掘による土坑は溝風のもの一条、穴が二か所、墳丘の降り切ったところにも皿状の浅い盗掘穴が開いていた。これなどは、盗掘者が横穴式石室と間違えて羨道開口部を狙ったように思われる。鎌倉時代の盗掘は、キトラ古墳や天武・持統合葬陵でも行われており、同一犯を前提的な仮説として現在、その研究も進めている。手口に似ている点があり、連続盗掘のようなことも想像できるからである。

慰霊祭挙行の3月6日から約2週間が経過、極彩色壁画と遭遇する劇的な日である1972年3月21日を迎えた。前日は不気味な大嵐で発掘を途中で止めた。目に入る砂塵に閉口し、地層の測図さえ満足にできない有様である。網干善教先生の強い意志も働き、午前で発掘現場を止めた。天候が少し回復した翌日、盗掘坑の底に姿を現した横口式家形石槨の前面を丁寧に清掃調査した。重厚な天井石上面を密閉する緻密な白色層。当時いた数名の学生と網干先生は狭いので交代しつつ手バチを主に使って、人が一人入れそうな大きさの盗掘孔の検出に努めた。右片側が開かれたこの孔は暗くて何も見えなかった。全容を露わにしたのは正午過ぎであり、南壁閉塞石を執拗に破った幅70～80cmの孔が姿を現した。そして、間もなく石槨の壁に絵が描かれていることが判明した。検出の当日、居合わせた数名の学生と網干先生は漲る興奮を抑え、落書きなどではなく、精緻な極彩色の壁画であることを共通認識した。そして、早くにその配置などを観察して簡単な模式図を描いた。その日の野帳の内容は、見返すと興味深い。



関西大学博物館に再現された高松塚古墳極彩色壁画を観察する70歳の著者(朝日新聞社奈良支局清水記者撮影・提供) [2022年3月]

盗掘で空いた口は狭かった。最初に盗掘孔から潜り込んだ1年先輩の女子学生が発する甲高い声が頼りだった。すべてが初めての経験で当惑したもの、1300年前の眠りから一挙目覚めた埋葬施設の中は薄暗いながらも良い視力を活かし、目を凝らして見た。目が慣れてくると、わが目を疑うようなものが飛び込んできたのである。夢だろうか、否夢ではなく、現実だった。誰もそう思ったに違いない。互いの顔を見て確かめ合った。緊張感による胸の高鳴りを抑えつつ、すぐに冷静さを取り戻し、壁面の構成や床の堆積土、漆喰の剥落状況、厚さなどを調べた。女子人物像の衣類の黄色・緑色・赤色が目立った。光の三原色だ。信号に使われている色だ。棺材らしき漆塗りの板材や盗掘者の持ち込んだ灯明皿も確認した。懐中電灯の役割がこの油痕を残した小さな皿である。黄泉の世界は神秘的であり、幻想的な暗い空間と残存している副葬品の数々を想像した。しかし、これらの壁画の画題は華やかでもある。特に東西の女子像8人は花のように思えた。ひもじい学生には、男子像からはお札の聖徳太子が目に見えようだった。極彩色壁画検出の夜には、現場宿舎に『通溝』が持ち込まれた。この本は今でも国書刊行会の復刻中古が10～15万円の高価格の希少本で、上下二冊に分かれており、箱には『満州國通化省輯安縣高句麗遺蹟 満州國通化省輯安縣壁畫墳 VOLUME I』(高松塚発掘の翌年である1973年復刻)とある。一人の学生が大阪の印刷所に預けていた原本を取りに帰り、素早く現場に持ち込んだのであった。通溝とは、中国東北部の鴨緑江中流域一帯の平野を指す。古代高句麗の根拠地であり、長寿王が西暦427年に平壤に移るまでの首都、輯安縣が所在した。広開土王碑はじめ、遺跡や墳墓の集まる所である。この書は池内宏・梅原末治の著で、高句麗壁画を通して高松塚壁画の国内初の図像の重要性を学生も知るところとなった。壁画発見のその夜、既に大陸・半島の壁画の知識が注入でき、非常に計画性高い構図・設計のもので、直ちに東アジア世界と触れ合う現実に溜息が漏れた。

発掘担当の網干先生はこの間、二度ばかり東京の会合出席中の末永先生に緊急連絡を取り、その後の適切な指示などを仰ぎ、日本で初めて検出された壁画古墳に遭遇した20歳の青年の一日は、あっという間に暮れてい

った。

今からちょうど50年前の1972年3月、日本の考古学はこれまでに経験したことのない壁画を有する古墳と遭遇した。奈良県の橿原考古学研究所と明日香村が発掘調査した高松塚古墳から発見されたもので、7～8世紀の小さな円墳が持つ未曾有の歴史的文化的価値を痛感した。高松塚古墳の発掘に関西大学の考古学研究生の一人として全日参加した私は20歳であったが、その一部始終を日誌に記録していたため、今もその驚きの臨場感と感動を呼び起こすことができ、盗掘の解明に苦勞したことや大勢の人々が考古学に関心を寄せ始めるようすを思い出すことができる。

ただ残念のことに、この時の調査は引き継ぎの準備を進め、4月6日に国への移管となり、奈良県・明日香村・関西大学は高松塚の発掘現場から一斉に引き上げた。一研究機関、一大学が相手にするような文化遺産ではなく、大所高所からの取り扱いが慎重に行われるべき唯一無二の古墳壁画であることから、末永先生、網干先生らはそのすべてを文化庁に委ねた。現場の調査を維持し続け、その名声を特定の地方や一つの大学に残すべきではない。そういうものに直面した時の進む方向の教えでもあった。末永雅雄先生の勇断であり、私の細密な調査記録もそのあたりで終わっている。

潔く現場撤収を図ったものの、私の心には一つの大きな宿題を残しているという感じ、違和感が今も消え失せない。それは高松塚古墳初期調査の正規の発掘報告書の刊行である。多くの人々は、半年後に世に出た分厚い『壁画古墳 高松塚』がそれに該当する書物と思っている。しかし、それは大きな誤解である。背表紙を見て欲しい。それはあくまで中間報告なのである。苦勞して作成した高松塚古墳の墳丘関係の多くの図面は半世紀にわたって凍結状態のままである。多くの情報が公にされず、眠っている。高松塚は私にとってあくまで古墳であり、その解明に精魂込めたのである。美しい壁画の価値だけに目を奪われてはならない。確かに特別史跡、国宝への道を早期にたどったが、本来ならば、正報告や総括報告書の発刊が急務であり、そのまとめが大前提である。まだまだ古墳として重要な事項を宿している高松塚古墳の真価を問い、引き出すべきなのではなかろうか。全幅の信頼のもと、すべてを国にバトンタッチした限りは、正報告の公刊も国に課せられた大きな課題である。私の調査日誌やメモ的に撮影した80枚前後の私的な記録写真に頼る人がきわめて多い昨今、第一次の調査として一部始終のことが収載された本報告の刊行を祈願してやまない。みんなが共有できる正式報告を活用できる日を迎えたいと正直思っている。文化庁の担当部局に惜しみない協力もできる日々はもはや限られてきたことに気が付いて欲しいのである。

会 員 投 稿

「郡使に関する一考察 その二元制」(2)

ID10453 天川 勝豊 (東京支部)

それは倭国は公孫氏政権などは中国の正統な王朝ではなく、単なる地方政権(軍閥)としか見ていなかったからであろう。魏ならば正統な王朝と見ていただろうが、公孫氏政権をそのようには。倭国としては中国の正統な王朝の冊封体制に入ることは望んでいても、軍閥如きの支配下に入る気はなかったのである。では何故、公孫氏政権を単なる地方政権としか見ていなかったと言えるのだろうか。そしてその支配下に入る気はなかったのだと。それについては、次回以降で述べていきたいと思う。

ところで公孫氏政権だが、どうして「遂」という文字が使われる程、倭国に使者(それが郡使)を派遣していたのだろうか。そしてそのように分析できるのか。これについても考える必要があるだろう。そのキーワードは私は「呉」にあると分析している。では呉とはどういう意味か。しかしこの件についても、次回以降で展開していきたいと思う。まずは郡使は二元制であることを種々の論点から証明していくこととしたい。

前回述べたことだが、魏志倭人伝(後述)と魏志韓伝(「是後、遂」の文言)を含めて考察していけば、郡使には二系統(二元制である)が有ると考えられる。Ⅰ・魏から遣わされた梯儁と張政という名前の魏使と、Ⅱ・公孫氏政権が遣わした魏志倭人伝には名前が記されていない使者の二系統が。238年を境として。そしてそのⅡ・郡使は最低でも三回は倭国に来ているのである。それが「遂」の文字から導かれる結論と言えるだろう。

ところで、もし郡使が梯儁と張政の二人だけならば、初めから「魏使」と書けば良いのではなかろうか。何も「郡使」という言葉を使う必要はないはずである。普通、使者には国名を使うのである。例え直接には、出先の機関から派遣されていようとも。

しかし陳寿は何故か「郡使」という語句を使っている。それも普通名詞だけの形で。そこには魏という文字

はおろか、固有名詞が入っていないのである。何とも不思議なこととは言えまいか。再度だが、使者には大抵はその国を表す固有名詞が入るのではなからうか。それこそ魏使であり、また後世の日本のこととなるが、遣隋使であり遣唐使などの。また六世紀初頭に描かれた職貢図には、倭国使という表現が使われている。それら全てに国名が入っているように。従ってそのように推察していくと、そこには、郡使とは「魏使ではない」ということを、暗に伝えようとする意図が有るのではあるまいか。私としてはそのように分析している。

以上のことから、魏志倭人伝を研究していく時、この「郡使の二元制」ということを、しっかり押さえる必要が有ると私は思う。そしてそのように考えると、魏志倭人伝に書かれている事で、すっきり理解できることがいくつか有るのである。これについては徐々に、それがまた二元制の根拠にもなるということで、展開していきたいと思う。

ところでそのような事は、つまり郡使には二系統あり、その内のⅡ・公孫氏政権の郡使も倭国に来て、「中国」としての立場で倭国に支配下に入るように迫ったということは、更に倭国はその支配下に入ったとは、魏志倭人伝にも魏志韓伝にも記載されていないではないか、という反論が出るかも知れない。確かにそのような記述は、どちらの書にも一切書かれていない。だが魏を正統王朝とする立場の三国志では、そのような事が、公孫氏政権を「中国」とするような事が、記載されない方がむしろ当然なのである。その事はしっかり理解する必要があるだろう。私はこの件はそのように考えている。従ってそれは反論にならないと言えるだろう。

我々は魏志倭人伝を読む時、いや魏志倭人伝にかぎらず史書を読んで研究を進めていく時には、当時の社会状況や政治的な力関係を鑑みて行間を読み、そして書かれていない事を読み取ることが大切なのではなからうか。何故なら現在と違って、時の権力者にとって不利な事、不都合な事は、記されないのが、そのような史書では普通のことだからである。そして時にはねじ曲げられることも有るのである。このような点を明確に押さえておくことも、また大事であろう。書かれていないということは、決してそのような事実や史実が無かったということではない。そう考えないで表面的な事、記されている事のみを読みとつても、真の理解は覚束ないのでは、なからうか。

逆に、Ⅰ・魏のみによる郡使(魏使)の派遣と捉えている方(私が知るかぎりでは全員であるが)は、では204年頃に帯方郡が設置されているのに、そして公孫氏政権は韓や穢を討伐して己の勢力圏に引き入れているのに、倭国には何も接触していないと考察しているのだろうか。そして倭国もまた何も接触せず(弁辰で鉄を取っているのに)、238年に公孫氏が征討されて初めて、魏のものとなった帯方郡と関係を持つようになったと捉えているのだろうか。そこらの見解を、前回記述した「是後倭韓遂属帯方」の文言をどう解釈するのかを含めて、伺いたいと思っている。

さてその郡使の二元制ということより明確にするために、そして記載されている事をすっきり理解するために、今度は魏志倭人伝を読み解き、分析していきたいと思う。先ず最初に、前回記したことだが、魏志倭人伝では或る一つの文字を根拠として、そのような見解を出している。よってその文字から検討していきたい。ではそれはどんな文字であろうか。それは267文字目の「常」の文字である。その文字は伊都国の説明のところ使われているのだが、そこは次のように書かれている。

「郡使往来常所駐」

この文言によれば、伊都国は「常」に郡使が駐留する所だと言うのである。この常という文字も「遂」と同様に、或る事実が最低でも三回は有った時に使う文字であろう。そう考えると、矢張り少なくとも三回(延べ三人)は、Ⅱ・郡使が倭国に行き(来て)駐留しているからこそ、使っているものと思われる。そのように推察すると遂と常はセットになっているとも考えられるだろう。(以下、次回)

従って遂だけでなく常の文字からも、Ⅱ・郡使の存在そして来倭というものを考察することは可能と言えるのではあるまいか。梯儁と張政のみが郡使としたら、その二人だけでは「常」の文字は使えないのである。この事にもしっかりと考えを及ぼす必要があると思われる。

更にこの常の文字が、郡使という語句とほぼセットで使われている(「郡使」という語句の使用はこの一回のみ)ことを考慮すると、Ⅱ・郡使が存在するということを暗示しているのではなからうか。(以下、次回)

神々の系譜が語る「天照大神 = 卑弥呼」

ID10126 伊藤 雅文 (近畿東海支部)

天照大神を卑弥呼とみる説は特に目新しいものではない。明治時代の白鳥庫吉博士が両者の人物像の類似を説いて以来、実に多くの研究者にそれは継承されてきた。近年では全邪馬連特別顧問の安本美典氏も数理工学文献の立場から提唱されている。

筆者は、『日本書紀』神代の記述が記す「神々の系譜」から天照大神の年代を推定した結果、天照大神は卑弥呼であるという結論に達した。その概略を記したい。

●系譜の遡り方

編年体で書かれた正史だとされる日本書紀だが、神代の時代に関しては年次を記していない。説話集のような形態で物語が進んでいく。

だから、そこに登場する神々が活躍した年代や、出雲の国譲りなどの出来事が起きた年次などは記されていない。

しかし、日本書紀はなぜか登場神の系譜については事細かに綴っているのである。それが、神代の真実を知る突破口になると考えた。

日本書紀は、神代と天皇の治世を神武東征という説話で繋いでいる。そして、初代神武天皇即位後は、即位年の太歳と、事績が治世何年の出来事なのかを明記することによって年次を追っていく。

そこで、今回神代の時代を遡る出発点となるのは、初代天皇の即位年となる。

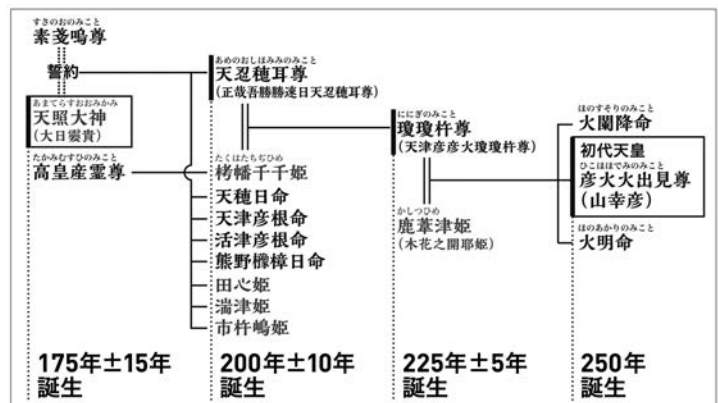
それは、西暦301年である。

本来、「初代天皇301年即位」の根拠を記すべきであるが、誌面の関係上割愛せざるを得ず、以下に要点のみを述べるに留める。

1 初代天皇は神武天皇であり、崇神天皇であり、彦火火出見尊(山幸彦)である
これは、三者の人物像および事績を比較検証した結果、本来同一人物であろうという結論に至ったものである。

2 初代天皇は西暦301年に即位された
これは、筆者の提唱する「無事績年を削除する紀年復元法」によって求められた年次である。
すなわち、遡りの出発点は「301年・彦火火出見尊即位」ということになる。

系譜を描くのに用いる史料は日本書紀の本文である。神代には多くの異伝が併記され、それを引用した面白い説も多いが、異伝はあくまでも異伝である。日本書紀編纂者が正しいと判断した、あるいはそれを日本の正しい歴史と決めた、本文に従うのが本筋だと考えるからである。



初代天皇の父と母

まず、初代天皇 = 彦火火出見尊の父と母である。

父は瓊瓊杵尊。正式名は天津彦彦火瓊瓊杵尊である。母は鹿葦津姫。一般的には木花開耶姫という美しい名前前で知られる女性である。

父の瓊瓊杵尊は天孫降臨の主人公である。高天原から日向へ天降る。その天降った先で鹿葦津姫を娶って生まれるのが、火閼降命・彦火火出見尊・火明命の三兄弟で、海幸山幸神話では火閼降命が海幸彦、彦火火出見尊が山幸彦ということになる。

初代天皇の祖父母

次は、初代天皇の祖父母である。男系の祖父母、すなわち瓊瓊杵尊の父母となる。

父は天忍穗耳尊。正式名は正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊という。母は栲幡千千姫命。

この二人には特に何かを成したというような記事はない。

初代天皇の曾祖父母

天忍穗耳尊と栲幡千千姫は、日本書紀では名前が記されるだけの存在だが、その父母、つまり初代天皇の曾祖父母は日本神話の主役とってよい面々である。

まず、栲幡千千姫の父だが、高皇産霊尊という神である。

日本書紀の本文では、出雲の国譲りと天孫降臨を主導するのはこの高皇産霊尊となっている。古事記や日本書紀の異伝では、天照大神(天照大御神)と高皇産霊尊(高御産巢日神)の2神よるものとされ、天照大神の存在感の方が大きいように思われる。しかし、日本書紀本文では高皇産霊尊が大己貴神に国を差し出させ、瓊瓊杵尊を降臨させる人物として描かれている。

そして、天忍穗耳尊の両親だが、これは両親と言えるかどうか。天忍穗耳尊は天照大神と素戔鳴尊の「誓約」といわれる不思議な儀式から生まれたとされる。

「誓約」の経緯は省略するが、天照大神が身に付けていた八坂瓊の五百箇の御統を、素戔鳴尊がかみ砕いて吹き出した霧から天忍穗耳尊が生まれるのである。

この時、八坂瓊の五百箇の御統から生まれるのは、天忍穗耳尊、天穗日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野櫛樟日命の五柱の神であり、天忍穗耳尊はその長男とされる。また、この直前に天照大神が素戔鳴尊の十握剣をかみ砕いて生まれるのが、田心姫、湍津姫神、市杵島姫神という宗像三女神である。

神々の系譜に実年代を与える

以上の親子関係を系譜化すると図表のようになる。

この系譜に実年代を与えていく。

基準年となるのは、先にみた初代天皇即位の301年から導かれる誕生年である。筆者が初代天皇と考える神武天皇と崇神天皇はともに52歳で即位されたことになっている。

つまり誕生年は250年ということになる。

神代の記述では何歳で子を生んだ等は一切記されないの、そこからは先は一世代の推定年数を当てはめていくしか方法はない。

現代では一世代平均は30年ほどとされるが、古代ではもう少し短かいのは明らかだろう。平均25年、誤差をプラスマイナス5年として算出してみる。

すると、図表に記したように、父母の代、瓊瓊杵尊の誕生年は225年 ± 5年となる。

続けて、祖父母の代、天忍穗耳尊の誕生年は200年 ± 10年となる。

さらに、曾祖父母の代、天照大神の誕生年は175年 ± 15年という年代が導かれる。

【結論】天照大神は卑弥呼である！

瓊瓊杵尊は「日向」に天降り、その子の初代天皇は「日向」から東征に出発された。この日向は、日本書紀編纂当時に「日向」と認識された地域であると考えられる。それ以外の地域を日向と表記してわざわざ混乱を招く蓋然性はないからである。すると、この日向は現在の宮崎県周辺であり、天孫降臨の舞台は九州である可能性が非常に高くなる。

時期は、初代天皇誕生の直前、250年の直前ということになる。天孫降臨から間もなく彦火火出見尊が生まれるからである。

すなわち、高天原を天照大神が治めていた時期と舞台は、3世紀前半の九州なのである。

すると、魏志倭人伝の記す3世紀前半に九州にあった女王国・邪馬台国(筆者は九州説である)および卑弥呼と、日本書紀の記す3世紀前半に九州にあった高天原および天照大神は、パラレルワールドでもない限り、同じことを描いていると考えざるを得ないのである。

神々の系譜から導かれる結論として、175年前後に生まれ3世紀前半の九州を治めた天照大神と、3世紀前半の九州を治めて247年に「年すでに長大にして」崩じた卑弥呼は同一人物としか考えられないということになるのである。

※ただし、筆者は天照大神と天忍穗耳尊の親子関係については疑問を抱いている。誓約という特殊な儀式による誕生だとされているからである。

★いろいろな新説をYouTubeで配信しています。【古代史新説チャンネル】をぜひご視聴ください。チャンネル登録もどうぞよろしく。

図表で解き明かす「ホモサピエンスが来た道、そして邪馬台国と大和朝廷への道」

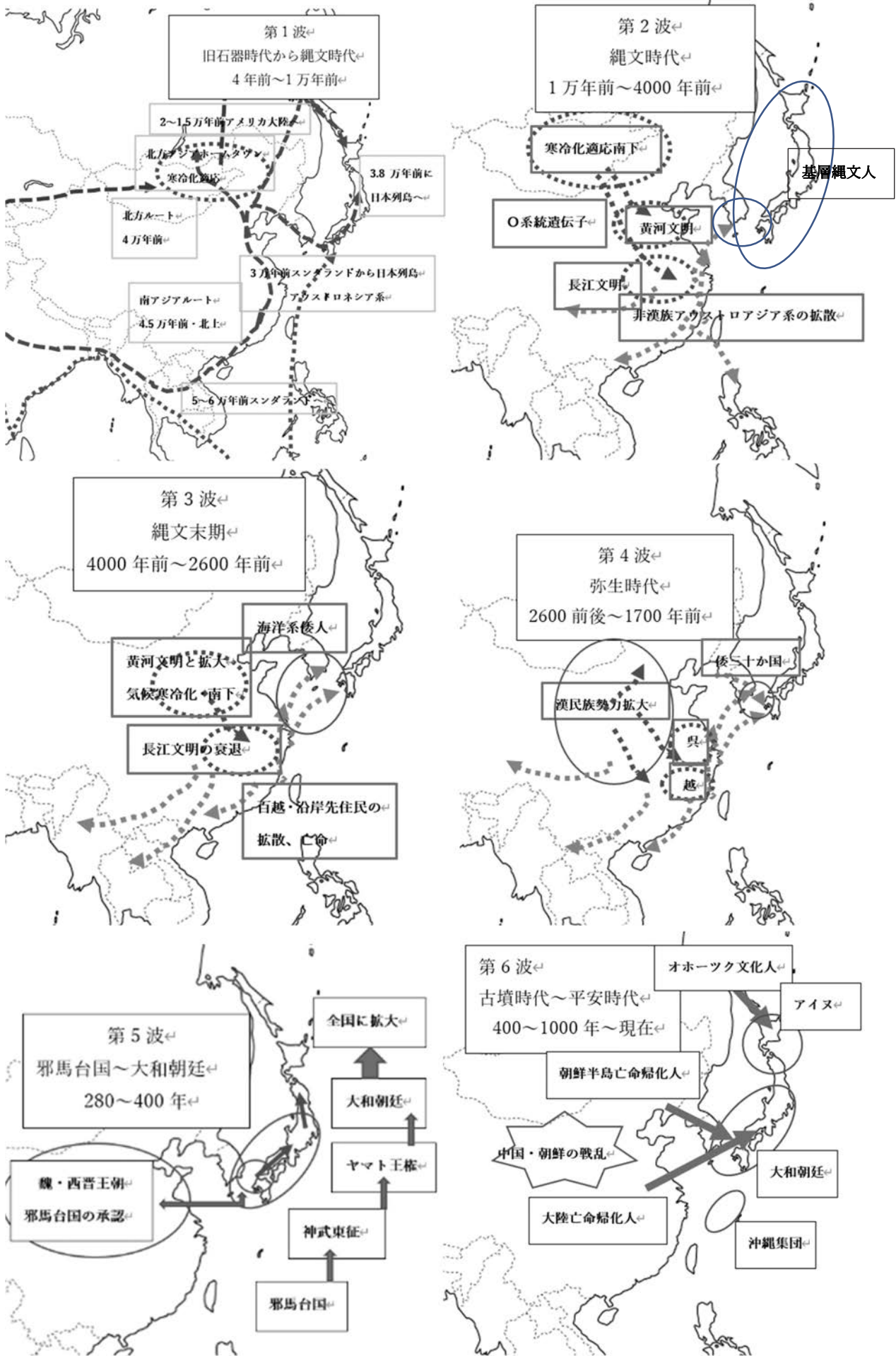
ID10002 内野 勝弘 (東京支部)

内野仮説「日本人の起源・多重構造説」・・・いろいろな地域から人々が、各々の時期にきて日本人が形成された

第1波(4万年前～1万年前・・・旧石器時代から縄文時代)

・ホモサピエンスは10万年前から6万年前に「出アフリカ」を果たしユーラシア大陸へ旅立ち、アフリカの環境に近い南回りでインド、東南アジア、スンダランドへ、別な集団は東南アジアから中国大陸を北上し氷河期で陸続きだったサハリン、北海道または朝鮮半島から浅瀬を舟で九州に4～3.8万年前頃に日本列島に到達した「縄文人南方起源説」(分子人類学者)。北回り説はヒマラヤの北を回りマンモスなど大型動物を追い南

図表で解き明かす「ホモサピエンスが来た道、そして邪馬台国と大和朝廷への道」



シベリア経由で4～3.8万年前に日本列島に到達した「縄文人北方起源説」(形態学者、言語学者)の説がある。

また南方(スンダランド)から陸や海を渡って北上し琉球列島や太平洋岸にきた人々もいた。

旧石器の日本列島の人口は数千人と推測され、あらゆる方向から、ごく少数が渡来(TRY)したのでらう。

- ・北東アジアにとどまった集団は最寒期に耐え「寒冷化適応」し新しいモンゴロイド形態に変化した。

第2波(1万年前～4000年前・・縄文時代)

- ・1万2000年前から最終氷河期が終わり地球は温暖化となり、海水面が上昇し日本列島は孤島化し、さまざまなルートで来た人々が日本列島内で1万年かけて熟成化し、交流、交易、交配して均一化した縄文人になった。その中でY染色体遺伝子D系統(D1a2b)の父系遺伝子を持つ人々が列島内で活動の場を広げ優位になり縄文人の基層集団になりC、Q系統は徐々に減少していった。母系を引き継ぐ遺伝子ミトコンドリアDNAは北方、中国南北、東南アジアと多様な遺伝子が残存した。列島内での交流が盛んになり北方アジア系言語の語順(SOV・主語・目的語・動詞)と南方系(アウストロネシア系)語彙が混合し縄文共通言語となる
- ・北東アジアでは寒冷化適応したY遺伝子O系統・後の漢民族系が南下し、黄河文明、長江文明を開いた。江南地方にいた先住民(アウストロアジア系、アウストロネシア系)は追われて周辺に拡散した。

第3波(4000～2600年前後・・縄文末期)

- ・5000～4000年前の寒冷化で黄河文明は打撃を受け、中原の漢族は食糧を求めて南下、侵略し長江文明は4000年前頃に衰退した。同時期、気候変動や森林破壊などでインダス文明も衰退した。
- ・BC1000年頃、中国大陸の沿岸周辺に住んでいた非漢民族「漁撈農耕民＝海の民」は長江文明の崩壊や春秋戦国時代の混乱で朝鮮半島南部や日本列島沿岸部と島々で縄文人と通婚し「海洋系倭人・海人族」となる。

第4波(2600前後～1700年前後・・弥生時代)

- ・大陸の戦乱、呉越の戦争、呉の滅亡(473年) 越の滅亡(334年) 秦の統一(221) 徐福伝説?(210年)の混乱で日本列島には江南地方の呉越の人々が水耕稲作、南方系習俗、生活様式、文化的語彙をもって渡来する。
第4波の江南地方、朝鮮南部の亡命、避難民の人々が渡来系弥生人となる。(Y染色体遺伝子O1b2)
- ・稲作を普及した渡来系弥生人男性と縄文系女性の通婚やその逆などが平和的に広がり弥生人口が増加した
- ・BC～2世紀 北部九州の倭人集団の中から海洋国家 奴国が勃興し後漢に朝貢し、鉄を抑え盟主となる
- ・2世紀後半から世界的気候変動、凶作、飢饉となり中国では黄巾の乱そして朝鮮半島の混乱が続き後漢王朝は衰退する。大陸のバランスが崩れ、海洋国家群・奴国連合と邪馬台国連合との「倭国の大乱」起こる
- ・後漢の支援を失った奴国連合に代わって邪馬台国が盟主となり卑弥呼を共立、大陸の鉄の交易権と配分を握る

第5派(AD280前後～400年 邪馬台国から大和朝廷時代)

- ・3世紀後半 邪馬台国は膨張し倭系の神武が東征し大和で即位、九州からの新しい祭祀導入と銅鐸祭祀の終焉
- ・4世紀中頃 崇神天皇時代 四道将軍の領土拡大と租税の確保、纏向の繁栄、前方後円墳 渡来技術導入
- ・4世紀中以降 景行天皇・ヤマトタケル 大和朝廷が関東、東北、九州に領土拡大し九州邪馬台国を吸収
- ・4世紀末 神功皇后の朝鮮半島に進出し、鉄資源を巡って高句麗の広開土王との激闘、朝鮮南部の倭人が渡来
- ・北部九州の言語(原倭人語)が大和へ移り「大和言葉」となり大和朝廷の全国拡大とともに共通言語となる
- ・統一国家となり東海、北陸、中国、九州から畿内の流動性が始まり、地方で縄文系と弥生系の混血が広がる。

第6派(400～平安時代～現在)

- ・5世紀の応神・仁徳天皇以降、中国・朝鮮半島からの移民・亡命民が「小集団」で渡来し政治、建築・土木・治水技術、農業、工業生産技術、仏教などの最先端技術、文化が入る(Y遺伝子O2・漢民族や朝鮮半島多い)
- ・6～7世紀 中国、朝鮮半島の混乱、伽耶の滅亡、百濟、高句麗が滅亡で大陸から帰化人が渡来する
- ・平安時代に編纂された「新撰姓氏録」によれば畿内に住む氏族のうち渡来系氏族数が27%である。
- ・5～7世紀には中国、朝鮮半島から戦乱を逃げて亡命、避難民が都から地方に拡散し日本人と同化した白村江の敗退後、倭国は朝鮮半島南部の経営から撤退し人々は日本に避難(Y染色体遺伝子O2、O1系統)

* Y染色体遺伝子(父系遺伝子) の比率 (データは文献によって一部異なります)

Y染色体遺伝子	D1a2b系統	O1b2系統	O2系統	C2系統	合計
本土日本人集団	33%	30%	20%	0～2%	83%
沖縄人集団	56%	20%	16%	0	76%
アイヌ人集団	80%	0	0	12%	92%
	基層縄文人	弥生系渡来民	中国朝鮮半島	北方系	

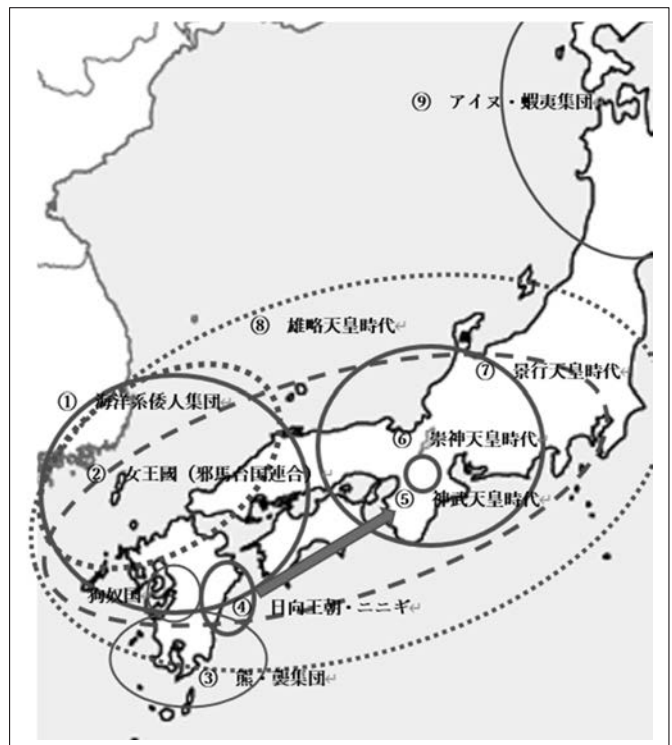
* 父系遺伝子のY染色体では、日本人はD系統とO系統で80%以上を占めるが、母系遺伝子のミトコンドリアDNAは北方、中国南北、南方、東南アジアと縄文以来の多様な遺伝子が現在まで存続している。

* 縄文時代にはD系統の男性が列島内で活躍してD系統が凌駕し、弥生時代には渡来系O系統が縄文人と混合した。古墳時代以降は最先端文化人の帰化人が大和から全国に広がった。大陸では遺伝子の多様性がないのは異民族の大量殺戮と淘汰が原因だが、日本では平和的にD系統の上にO系統が広がり緩やかに同化していった。

一万年以上の「基層縄文人」の上に渡来系弥生人、古墳時代以降の帰化人が薄くのって現日本人ができあがった

***表「邪馬台国から大和朝廷への拡大図」**

- ① 紀元前10世紀ごろから弥生時代にかけて「農耕・海洋民」が朝鮮南部、北部九州、山陰で先住縄文人と混合し後の倭国三十国となる
- ② 倭国大乱で勝利した女王国の版図と邪馬台国と争った狗奴国(熊本県北部)の位置
- ③ 南九州の縄文系倭人、のちの熊・襲
- ④ 邪馬台国・傍系・ニニギは狗奴国との争いで天孫降臨し日向王朝を興す。日向三代
- ⑤ 神武兄弟は日向から東を目指し大和へ大和朝廷の礎を築く(3世紀末)
- ⑥ 崇神天皇時代に四道將軍の領土拡大と租税確保と前方後円墳の築造(4世紀中頃)
- ⑦ 景行天皇・ヤマトタケルの植民地政策九州邪馬台国は大和朝廷に組み込まれる
- ⑧ 神功、応神、仁徳時代の朝鮮半島侵出雄略天皇時代に全国統一。植民地政策政治、文化、言語の大和化と縄文+弥生の混血(年代について詳しくは邪馬台国新聞第10号 内野寄稿文「邪馬台国時代の年代論」を参照ください)



結論

ホモサピエンスのアジアへの道のりはアフリカから出発し「西から東へ」東の果ての日本列島への流れである。

弥生時代、邪馬台国時代、大和朝廷時代の歴史は「大陸から九州へ、九州から大和へ、大和から全国へ」である文明は「上流から下流へ」そして勢いは「西から東へ」であり、大きな流れを「各時代を超えて」俯瞰してみると邪馬台国は北部九州にあり、その一集団が大和に東遷し大和朝廷の礎をつくったことが見えてくる。

正始八年と以死

ID00000 岡上 佑 (近畿東海支部)

さて、魏志倭人伝の純然たる読みの中で、定かにならないのは、何も邪馬台国の所在位置だけと言うわけでもない。本小論では、「正始八年から始まる一連の張政による見聞録」をどう読み解くかについて、私なりの論証を加えることにしたい。

魏志倭人伝中、「其八年」から始まる記事の中には、倭国の救援要請、張政の派遣、卑弥呼の死とその後継をめぐる混乱、台与の擁立、張政による檄の読み上げによる告諭、張政の帰還と台与の遣使、と沢山の出来事が

記述されている。そこで、一連の記事には、正始八年以降の事績も紛れているのではないかという考え方が出てくる。更に人によっては、この時に張政は正始八年を大きく超えて、軍事顧問として長く倭国に滞在したと考えることまである。しかし、私は、張政が倭国に到着した時の表現「卑弥呼以死」は、「卑弥呼はすでに死んでいた」と読むのが適当であり、一連の記事は、やはり正始八年からの一連の事件であったと読むのが適当であると考えている。

どうして「すでに死んでいた」と読むのかと言え、それは、「以」と「已」は発音としても同じで、文字の成り立ちからしても同根であり、三国志各所で通用していることが挙げられるからである。実際に三国志本文を紐解いてみても、次に挙げるように「已→以」の通用例が複数見つかる。また、トルファンから見つかった古本三国志に、新たな通用例を見つけたので、両者通用の具体例として紹介したい。

傅嘏伝：今權以死託孤於諸葛恪

「今、孫權は已に死に、その末子(孫亮)を諸葛恪に託した。」

臧洪伝：城中糧穀以盡，外無疆救

「城中の糧穀は已に尽き、外には疆救はない。」

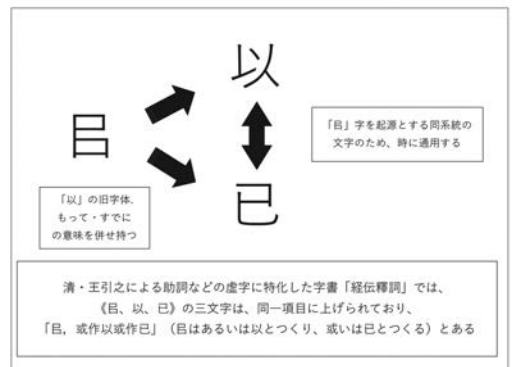
杜襲伝：吾計以定，卿勿復言。

「私が計は已に定る、卿、復言することなかれ」

陸績伝：從今以去 (*通行本三国志には、「從今已去」とある箇所)

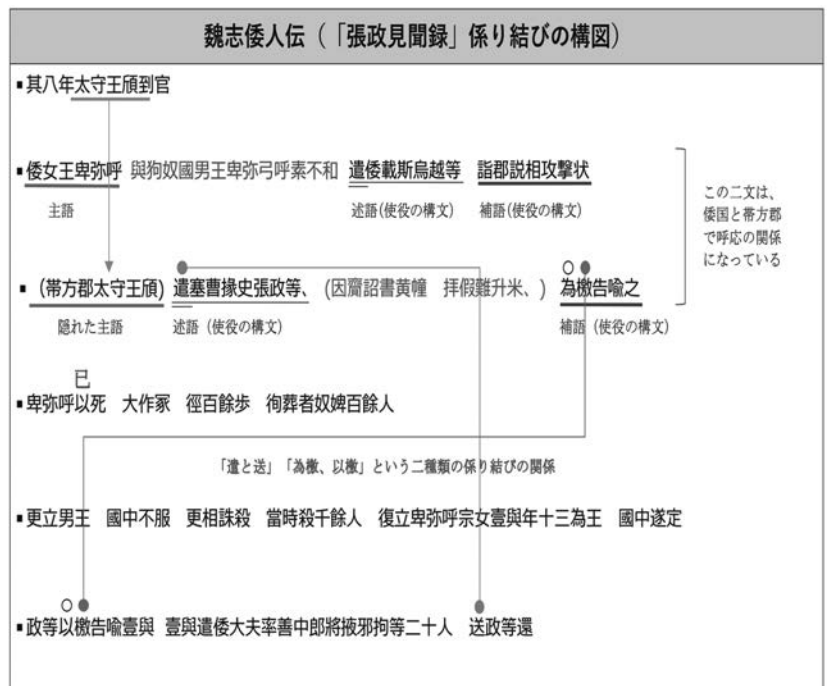
なお「以→已」への通用例(已来と以来など)は、正史三国志で余りに頻繁なので、例示は割愛したい。兎に角、「以と已」は、普通に相互通用して使われており、倭人伝に限って通用させないと言うようなことは非合理である。

そこで、其八年の記事を「すでに」の意味で読んでみると、非常に鮮明な像が結ばれてくることがわかる。すなわち、正始八年、帯方郡太守の王頎は、檄を作って(為檄)張政に持たせ、倭国へと「遣」わして、(張政が到着した時には、倭国王は已に死んでいたが、その後新女王が擁立されて)張政は、王頎から託された檄を以って(以檄)、新しい倭国王に告諭して、最後に新倭国王に「送」られたのである。



このように「すでに」の意味を読み取ることで、張政を巡る「遣～送」の関係、加えて帯方郡太守の檄についての「為檄～以檄」の関係という「係結び」の効いた締めのある文章が復元してくる。つまり「已に死んでいた」と読むことで、正始八年で始まる記事は、時間的にも一連の記事であることが判明するのである。

以上は、文法・語法的な解釈論であるが、もう少し別の角度からも客観的にこの読みを証拠立てるのが、宋代に成立した類書、「冊府元龜(卷九六八・外臣部)」にある壹與朝貢の記事である。そこには、正史八年の出来事として、女王壹與が朝貢してきたと記録されているのである。これは、冊府元龜の編纂者が上述の私と同じような解釈を行っていたという証拠であろう。



さて、ここまでの論考が正しいものだとすると、我々は魏志倭人伝という史料について、重大な性質に迫ることができる。それは、魏志倭人伝が、正始八年(247年)という極めて中途半端な時系列の記述で、尻切れトンボのように終わっていると言うことだ。これは、陳寿が魏志倭人伝を執筆する際にどのような態度で挑んだかということを示すもので、実際には、晋書・四夷伝に

「及文帝作相、又数至」(司馬昭が宰相になるに及んで、また数回朝貢に至った)

とあるとおり、曹魏においても、正始八年(247年)以降も倭国からの朝貢は行われていた。すなわち、陳寿は、魏志倭人伝を記すにあたって、正始八年(247年)以降の朝貢記事を補録することを怠ったと言う事である。念のため、魏志に残る東夷伝全体を見回してみても、「正始」の年で始まる文章が目につくが、それ以降の記事は一つして存在しない。ここから言えることは、陳寿は魏略や魏書という先行史書を引き写して現行の魏志倭人伝を編纂したに相違ないが、わざわざ自ら最新資料を集めて、正始年間以降、禪譲のあった265年、曹魏最後の皇帝である元帝期までを補うような労を取らなかったと言うことである。

では、陳寿が東夷伝を編纂していた時に見ていた資料が、ほぼそのままに現行の東夷伝そのものであったとして、現行の東夷伝の文章から、その正体を示唆するような文章はないだろうか？ 実はそれがあるのである。紙幅の関係から簡単に指摘するにとどめるが、それは、東夷伝・高句麗条である。魏志東夷伝に現れる「今」の表現に注目することで、東夷伝のベース部分の執筆の時期が透けて見えるのである。

本論は、岡上 佑「魏書倭人伝の探究」の内容を焦点を絞ってリライトしたものです。署名で検索して頂ければ、アマゾンの電子書籍にて全文を読むこともできます。また、同書の製本版もごぞいます。詳しくは、yu.okagami@gmail.com まで。

日本古代史の三大疑問

ID101580 尾関 郁 (東京支部)

日本の古代史の三大疑問にお答えしております

- ① 金印「漢委奴国王」は与えられたか？
- ② 金印「親魏倭王」や百枚の鏡は卑弥呼に届けられたのか？
- ③ 「邪馬台国」はどこにあったのか？

この三つを私は古代史の三大疑問としております。一番目の課題は2019年の全邪馬連・研究発表会で述べたように「印綬」という用語が「金印紫綬」を意味するのか、ということです。大庭脩著「親魏倭王」ではタスキとして写真が載っていますが、いかに。

二つ目の課題は、三国志・倭人の節ではなるほど魏の皇帝明帝が口約束はしたものの、その後に魏使が持って来た返礼のリストに載っていないのです。それに対する陳寿の不満や齊王芳新政権の対倭、いや対属国政策の転換があるやなしや……。

最後の課題については三国志の倭への行程文をきちんと読むなど四つのアプローチで解明を試みましたので、ほぼ確定したのではないのでしょうか、と自惚れています。

書名は衝撃！ 日本の古代史で、出版社はV2ソリューション、価格は1300円＋消費税。Googleで「尾関郁」とご検索のほどをよろしく。読み始めると興奮されるのではないのでしょうか。著者の成長と学問の発展のために質問・問題点の指摘をお寄せいただけると願っております。kikezo@ezweb.ne.jp
古代史研究の風雲じい・尾関 郁(かおる)

魏志倭人伝「水行十日 陸行一月」～朝鮮半島内の経路を踏まえた考察～

ID10299 酒井 正士 (東京支部)

『魏志倭人伝』には、投馬国に関する記述に続いて「南至邪馬壹國 女王之所都 水行十日 陸行一月」とあり、一般的には「邪馬台国は投馬国から水行十日、陸行一月の場所にあった」と解釈されています。しかしながら、私は「水行十日 陸行一月」を魏の使節の出発点である帯方郡治から邪馬台国までの旅の日数と考えます。本稿では朝鮮半島内の経路について考察し、郡治からの日数と考える根拠について述べてみます。帯方郡治の候補地としては北朝鮮の沙里院サリウォンもありますが、ここではソウル市の風納土城フナツツシとして話を進めます。

魏志倭人伝冒頭の「從郡至倭 循海岸水行 歴韓國 乍南乍東 到其北岸狗邪韓國」については、朝鮮半島の西

岸を船で南下し、珍島付近で東に向きを変え釜山市に到ったと説明されることが多いのですが、私は牙山湾に上陸し、韓国の地を通過して、私が狗邪韓国の港と考える馬山市に到ったと解釈しています(図)。

途中、尚州市(古代の沙伐国)を經由したと考えられますが、尚州市の西側には山越えの古道があり、一行はこの路を通過して小白山脈を越えた可能性が大了。牙山から馬山までは約360キロメートル、周髀算経・一寸千里の法に基づき1里=77メートルとすれば4,700里ほどの道程になります。

馬山からは船に乗って對海国(對馬)に向かいました。朝鮮海峡は道中最大の難所であり、航行時間をできるだけ短くするため、對馬に最も近い巨濟島南端から出航したと考えられます。巨濟島南端は對馬北端とほぼ同緯度ですが、船は對馬海流によって北東に流されるので、北端以外に上陸するには余計な労力が必要となります。また、当時の船舶の性能を考えると、對馬北端が夜明けに出航して日暮れまでに到着できる限界と思われるます。

對馬北端で古代船の上陸に適した場所を探したところ、豊漁港が最有力と考えられました。豊漁港は深い入江の奥にあり、波風の影響を受けず停泊に有利な立地です。入江の西岸には那祖師神社という式内社があり、古くから航海の安全を見守ってきました。この神社の参拝方位は巨濟島南端の港に向いていて、朝鮮半島からの人びとが出航地を偲んで建立した可能性も考えられます(「邪馬台国新聞・第12号」拙稿)。

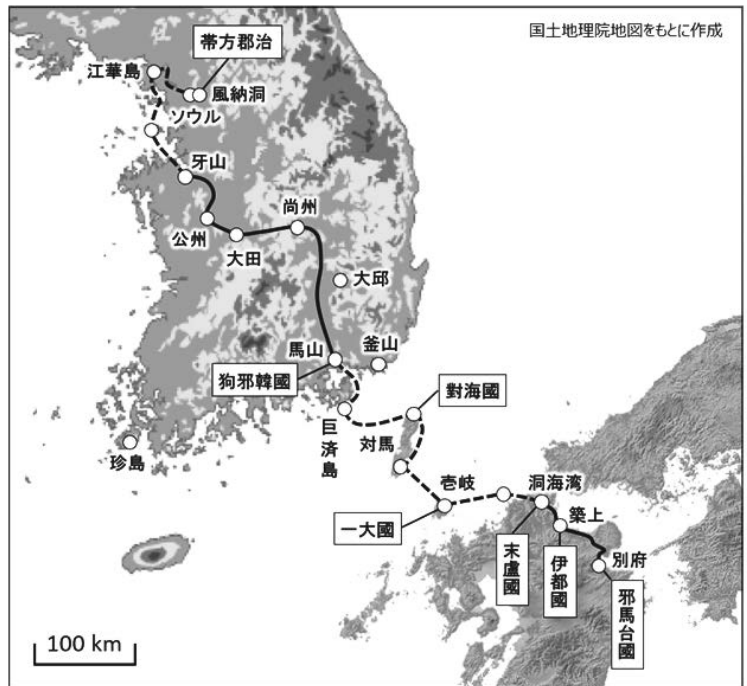
『邪馬台国は別府温泉だった!』(小学館新書)の中で詳しく説明したように、魏の時代の中国における測量技術のレベルは高く、正確な方位のみならず海上の直線距離を測定することができました。『魏志倭人伝』には「始度一海 千餘里 至對海国」「又南渡一海 千餘里 名日瀚海 至一大国」「又渡一海 千餘里 至末盧国」とあり、「狗邪韓国~對海国」、「對海国~一大国」、「一大国~末盧国」間の距離は、それぞれ1,000里(77キロメートル)以上であることがわかります。このことを踏まえて、私は一大国(壱岐島)から100キロメートル東にある洞海湾東南岸を末盧国と考えました。狗邪韓国(馬山)から末盧国までの航行日数は6日間と考えられ、帶方郡治(風納土城)から韓国の上陸地(牙山)までの4日間と合わせて10日間となります。

末盧国に上陸した魏使一行は、伊都国、奴国、不彌国の順に陸路を進みました。私は伊都国を福岡県築上町、奴国を福岡県豊前市、不彌国を大分県中津市と考えていますが、中津市は日田往還と日向街道の分岐点に位置し、日田往還側に進むと、大分県本耶馬溪町、日田市、熊本県阿蘇市、宮崎県高千穂町を経て延岡市に至ります。延岡市から南、日向灘沿岸は日本神話との関連が深い土地で、私は宮崎県西都市の都萬神社が投馬国の中心地だったのではないかと考えています(「邪馬台国新聞・第13号」拙稿)。

『魏志倭人伝』の編纂者・陳寿は不彌国の南の大国・投馬国の存在について知っていましたが、魏使一行は投馬国を訪れておらず、別の機会に直接船で訪れた時の記録に基づき「南至投馬国 水行二十日」と記載したのではないのでしょうか? 帶方郡治から日向灘の美々津港までの航行距離は約1,200キロメートルで、對馬海峡を渡ることができる船ならば20日で到達可能と思われます。

「水行」を「河川の航行」と限定的に解釈される方もおられますが、台湾海洋学院大学教授・謝銘仁博士は、「河川や運河・湖沼ならびに沿海・海上を行くすべての場合に使われる」と述べておられます(立風書房『邪馬台国 中国人はこう読む』)。謝博士は台湾師範大学で中国文学を専攻し、訓詁学の素養もある方で、少なくとも「語義」の解釈については信頼すべきと考えます。

洞海湾岸から私が邪馬台国と考える別府市までは約120キロメートルの道程で、陸行距離は朝鮮半島内と合わせて約480キロメートルとなります。陸行日数は1日当たりの歩行距離によって変わってきますが、平坦な道の歩行距離は1日20キロメートルと言われ、山道も通ることも考慮すれば24日+アルファ、「南至邪馬壹国 女王之所都 水行十日 陸行一月」を「帶方郡治からの旅の日数」と解釈することが可能です。



推定される魏の使者の経路(帶方郡治~狗邪韓国~對海国~末盧国~邪馬台国)

筆者は会報10及び13号で梁書倭伝にある266年の晋への朝貢で台与と共に並んで爵位を得たのは卑弥呼の死後立った男王であり、それは纏向を作った公孫恭またはその後継者とした。そして『水行10日陸行1月』はこの男王の使者が晋の役人に対して述べた纏向への旅程であって邪馬台国への旅程ではないとした。

そうすると九州説にとって最も都合の悪いこの長い旅程は邪馬台国の場所探には不要となり、元々魏志倭人伝の記載は九州色が強い“邪馬台国は九州”の可能性は非常に高くなる。そして拙著『九州の邪馬台国 VS 纏向の騎馬民族』の中で邪馬台国を中心とした女王の国々は熊本中部以北の弥生渡来人の国であり、狗奴国は熊本中部以南の縄文色の強い国であるとした。この本で示した女王の国々の範囲は2018年12月から翌年にかけて開かれた国立科学博物館の企画展『砂丘に眠る弥生人』で示された渡来系弥生人の範囲とほぼ一致する。これで近畿か九州かの論争はほぼ決着したと考えている。

魏志倭人伝では女王国は邪馬台国とほぼ同じ意味で使われているので今回は卑弥呼を共立した30余りの国々のことをあえて“女王の国々”と呼ぶ。今回この女王の国々と狗奴国がどのような国々だったのかももう少し掘り下げて考えてみたい。

女王の国々は4つのゾーンに分けられ魏志倭人伝では原則として北から南に書かれている。1つ目は里程と戸数が示された伊都国や奴国など7国、次に筑紫平野の邪馬台国周辺、3番目は名前のみが列記された熊本北部の21国、そして宮崎の投馬国の4つでありゾーン外として熊本南部の狗奴国となる。

ゾーン1；里程と戸数で示された7国

7国の中で狗奴韓は朝鮮半島南端の金海市付近、対馬国は対馬島、そして一大国を壱岐島とすることに異論を挟む人は多くはないだろう。そして末盧国は唐津、伊都国を糸島、奴国を春日市の須玖岡本遺跡とするのが一般的かと思われる。しかし、末盧国、伊都国、奴国の比定地をこのようにすると魏志倭人伝に記載された距離や方角とかなり異なってくる。

魏志倭人伝では狗奴韓～対馬国、対馬国～一大国、一大国～末盧国は全て千余里で等間隔になっている。しかし比定地間の距離、金海市～対馬、対馬～壱岐間はほぼ同じだが、壱岐～唐津間はかなり短くなる。さらに末盧国から伊都国は東南とあるが唐津から糸島は東北東だ。そして末盧国～伊都国間は500里、伊都国～奴国間は100里で5倍であるのに対し唐津～糸島間は糸島～須玖岡本遺跡間の2倍ほどしかない。元々、唐津とするのは末盧がこの地方を包括する地名・松浦まつらに似ており、伊都国は糸島に発音が似ているからであって語呂合わせに過ぎない。比定地の見直しが必要だ。

そうすると末盧国は福岡市の西新町遺跡、伊都国は大宰府近傍、そして奴国は筑紫野市周辺とすることで距離や方向がほぼ魏志倭人伝通りになる。

西新町遺跡からは多くの大宰府系の遺物が出ており国際貿易港として弥生時代から大陸への窓口だった。近くには後の鴻臚館跡地もあり外国の要人を迎えるのに最も相応しい場所と言える。魏の使節はここに上陸後、伊都国のあった現在の西新町遺跡の地に向かいそこに留め置かれたのだと思う。大宰府は西新町遺跡から東南方向になり短里で約500里である。

伊都国は『郡使の往来に常に駐まる所なり』と外交施設があることや『一大率を置きて、諸国を檢察し、諸国を之を畏れ憚る。常に伊都国に治し、国中に於いて刺史の如き有り』と書かれ監察機能を持っており後の大宰府と同じ役割を担っていた。そうすると場所的にも機能的にも大宰府が一番伊都国に相応しいことになる。現在の西新町遺跡には大きな弥生遺跡はないが、伊都国は千余戸とされ大国ではない。大宰府は邪馬台国時代からずっと大宰府だったと言うことになる。位置的に言って邪馬台国のあった筑紫平野に入るための関所のような存在だったのではないだろうか。

戸数2万余戸の奴国に比定した筑紫野市くまにしおだには隈・西小田遺跡と言う福岡県最大の埋葬施設を持つ弥生遺跡があり不弥国はその周辺の小集落だろう。

ゾーン2；筑紫平野の邪馬台国

筑紫平野には吉野ヶ里遺跡や平塚川添遺跡など大規模な弥生遺跡がいくつもあり戸数7万戸とされる邪馬台国に相応しい地域と言える。その中で卑弥呼がいたのは久留米市近傍だったと思う。この周辺にもいくつもの弥生拠点集落があり卑弥呼の墓の有力候補・祇園山古墳がある。近くには筑後一之宮の高良大社があり、その周囲は3kmに渡って神籠石に囲まれ、この神籠石は7世紀のものと言われているが大溝から弥生式土器が出ている。卑弥呼がここを拠点に扶余と攻防をしていたのではないかと想像を巡らしている。

ゾーン3；熊本北部から阿蘇地域の21国

菊池川沿いの方保田東原遺跡や熊本市を流れる白川沿いから阿蘇にかけては多くの弥生遺跡があり名前のみ

が列記された21国に相応しいと思う。この地域では多数の鉄器類が出ているが、特に阿蘇地域は住居跡から多くの工具類が出ており鉄器が一般化していた。弥生時代の日本で鉄器が一番普及していた場所と言える。21国の中で3つの国に『蘇』の字が使われており、これらが阿蘇にあった国ではないだろうか。海から遠く離れた阿蘇地域に高度な鉄器文化が発達したことは大きな謎だが肥後一之宮が菊地や熊本平野ではなく阿蘇神社であることも頷かれる。阿蘇神社は6年前の熊本地震で大きく損壊した。一刻も速い復旧を願うのみである。

ゾーン4；宮崎にあった投馬国

水行20日の投馬国は宮崎の西都原が一番相応しいと思う。この辺りには妻の地名が多く中国語の『トゥーマ』に発音が似ている。更に律令時代には当磨と言う駅もあったと言う。また川床遺跡からは多量の鉄器が出ている。宮崎は九州で最も前方後円墳の多い所で、ヤマト王権はこの地を制するのに多くの犠牲を払ったのではないかと想像する。

別ゾーン；熊本南部にあった狗奴国

熊本県の中央を流れる緑川のすぐ南に宮地遺跡と言う大規模な弥生遺跡がある。この遺跡には邪馬台国時代に盛衰の跡があり、狗奴国と女王の国々との攻防の地ではなかったかと想像する。ここより南には大規模な弥生遺跡はなく鉄器類も少なく人吉盆地を中心に熊本南部では縄文的要素が強い弧帯文様を施した免田式土器が多数出ている。この土器が多く出土する範囲が狗奴国と考えるが狗奴国と女王の国々との対立は“縄文人 対弥生渡来人の対立”だったと考えている。

卑弥呼の朝貢後、倭国と言う国名が出てくるが『倭国乱れ相攻伐すること歴年、すなわち共に一女子を立てて王と為す』とあるので倭国と今回の女王の国々は同じ意味になる。日本全体を意味する5世紀以降の倭国に相当するのは魏志倭人伝では『倭』と言える。朝貢前の卑弥呼は単に『女王』としかないが、朝貢後は『倭の女王』または『倭王』となる。従って狗奴国は本来朝貢後の彼女に従わなければならなかったはずだ。了

2022年2月2日

(参考文献)

- ・槌田鉄男『九州の邪馬台国 vs 纏向の騎馬民族』 文芸社 2019年
- ・企画展『砂丘に眠る弥生人—山口県土井浜遺跡の半世紀—』 国立科学博物館 2018年
- ・第39回くるめの考古資料展『筑後川と弥生時代のくるめ』 久留米市教育委員会 2014年
- ・菊池秀夫『邪馬台国と狗奴国と鉄』 彩流社 2010年

「難升米」と「載斯烏越」とは誰か

ID10273 平松 全一 (東京支部)

(1) 「難升米」の読み方

「難升米」については、頭の字が「な」又は「なん」（「難」は「難」の減筆とする）であるから「奴国」の人ではないかとか、読みの連想から「田道間守(たじまもり)」ではないかと言われたりしているが、少し考えれば「魏志倭人伝」では「奴」の字は一杯使っているのだから、「奴国」の人なら「奴」を使えばいいのに、何故「難」にするのか不明であり、「田道間守」は派遣者が男王になってしまう点がある。そこで、こうした視点から離れ、少し視野を広くして「魏志」以外に彼の名が出ている資料はないのか、「難升米」は「苗字」か、「苗字＋名前」か、魏への派遣使節に相応しい倭国の高官(太夫)であったか、というような点に着目して名前を検討したら如何かと考える。

そこで、まず、「難升米」の名を記す別資料の存在を調べると、他に名を記す中国史書はなく、「日本書紀」の「神功紀三十九年の条」の「魏志に云わく」の引用文に「難斗米」が出て来るが、これは「升」が「斗」になっており、いずれが正しいのか不明である。だが、8世紀初期に日本に入った「魏志」が参考にされたとするならば、現存の「魏志」の原本である紹興版(12世紀)よりも筆写回数が少なく相対的に原本に近い可能性(勿論、筆写回数が少ないから、より正確という保証はない)があると言えないこともない。

そのため、こうした根拠の一つとして、卑弥呼が魏に朝貢使節を派遣した年は「魏」が「公孫氏」を滅ぼした時期(景初二年八月)から考慮して、紹興版の「魏志」の「景初二年六月」よりも、「日本書紀」の引用文の「明帝景初三年六月」の方が正しいのではないかと、という理由がよく援用されるが、更に、建中校尉梯儁等が倭国に派遣された年(正始元年)との関係を見ると、景初三年の派遣なら同年十二月に詔書が出て、その翌年に梯儁等が派遣されたことになるが、景初二年の派遣なら詔書は同年十二月に出されることになり、事件(乱や皇帝の交代等)もないのに景初三年を1年空白にして梯儁等の派遣となり、やや不自然であるから、この点でも「景初三年六月」の派遣の方がより妥当と思われる。

従って、「日本書紀」の引用文の方が紹興版の「魏志」よりもやや信頼出来るとするなら、「難升米」よりも

「難斗米」の方が正しい可能性もあり、「なとめ」という読みから「中臣」(なかとみ) という名が連想される。ただ、この場合、「苗字」のみの表示となるが、これは「烏賊津使主」という下の名が長い為、そうなったものと推測される。

また、派遣者は神功皇后(女王)であり、「中臣烏賊津使主」はその高官であったから、魏への朝貢使節に相応しい身分であったとも言える。

(2) 「載斯烏越」の読み方

次に、「載斯烏越」であるが、「さちひこ」と読めないかということである。彼は「卑弥呼」が狗奴国の王「卑弥弓呼」に攻められた時、帯方郡に派遣して救援を要請させた人物であるが、読み方不明でそのまま使ったり、載斯と烏越の間に・を入れて二人扱いにしているが、これは「さしおこ」→「さちひこ」と読むべきではないかということである。こう言うと、そう読めたらどうだということのかと逆に言われそうだが、これが「さちひこ」であれば、「さちひこ」は「葛城襲津彦」に繋がり、「葛城襲津彦」は「神功皇后」に繋がり、「神功皇后」の名の「息長足姫尊」の「姫尊(ひめみこと)」が「卑弥呼」に繋がるという形になり、「神功皇后」＝「卑弥呼」となる可能性があるということなのです。

そこで、次に「葛城襲津彦」とはいかなる人物か、何故「さちひこ」と呼ばれたのか、を見てみると、彼は神功皇后代から仁徳天皇代にかけて主に朝鮮半島諸国との軍事・外交の分野で活躍した人物であり、「倭国」の危急存亡の時に当たり、硬軟織り交ぜた外交交渉が行えた人物と見られることから、帯方郡に派遣して支援を求めるには最適の人物であったと思われる。また、「神功皇后の62年の条」には彼が百済や加羅で「沙至比跪(さちひこ)」と呼ばれていたことが「百済記」に明記されており、帯方郡も朝鮮半島の一部であり、言葉はこれらの国と類似していたはずであるから、魏志倭人伝で「載斯烏越」という表現になったのも納得出来るのではないかと、ということなのです。

(3) 結論

これらの事だけで、神功皇后＝卑弥呼と断言するつもりはないが、「日本書紀」が神功皇后＝卑弥呼とした支援材料の一つにはなるものと思う。

DVD「安本美典が解き明かす古代史・邪馬台国の真実!!」

この度、邪馬台国の会制作委員会では、安本学説の普及を目的にしたDVD(全6回)を制作いたしました。

1セット 特別価格 2,000円(送料込み)

「安本美典が解き明かす古代史・邪馬台国の真実!!」全六回

- 第1回 「魏志倭人伝における邪馬台国までの道程」(23分)
- 第2回 「邪馬台国は福岡県甘木朝倉だ!」(22分)
- 第3回 「邪馬台国の女王・卑弥呼は天照大御神である」(31分)
- 第4回 「神武東征は史実に基づいている」(37分)
- 第5回 「三角縁神獣鏡は卑弥呼の鏡ではない」(27分)
- 第6回 「纏向邪馬台国説を撃破する!」(33分)

■内容 トールケース入りDVD 2枚組(全6回) 1セット 特別価格 2,000円(送料込み)

■申し込み方法

- ① 邪馬台国の会ホームページ(<https://yamataikokunokai.com/>)「DVD申し込み」からご注文。
- ② 邪馬台国の会事務局に、メールで申し込み。メールアドレス dvd@yamataikokunokai.com
- ③ 同じく、郵送で申し込み 郵送先 〒154-0023 東京都世田谷区若林3-16 邪馬台国の会事務局 宛

■支払方法 商品到着後、同封の請求書に記載する郵便振込口座にお振込みください。